

稻木遺跡

～県道西白方善通寺線桿蔽踏切除却工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

1989年3月

稻木遺跡発掘調査団

刊行にあたって

この報告書は、善通寺市教育委員会内に事務局を置く稲木遺跡発掘調査団が、香川県土木部道路課の委託を受けて、昭和63年8月1日から平成元年3月31日まで実施した県道西白方一善通寺線樋藪踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

善通寺市内ではこれまでにも「王墓山古墳」「仲村廃寺」「彼ノ宗遺跡」「仙遊遺跡」「九頭神遺跡」など発掘調査が数多く実施され、貴重な文化財が多数発見されております。これらの報告書を通して埋蔵文化財に対するご理解を深めていただき、今後の学術文化の向上、本市文化財行政に少しでも役立てて参りたいと存じます。

これまで、発掘調査にご協力頂きました地元の皆様をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げ、今後とも一層のご支援とご協力を切にお願い申し上げる次第であります。

平成元年 3月31日

稲木遺跡発掘調査団長

善通寺市教育長 勝田英樹





稻木遺跡第3調査区遺構検出状況（西から望む）



竪穴住居内に竈における甌の出土状況（SH-07・南東から望む）

例 言

1. 本書は県道西白方普通寺線樺藪踏切除去工事に伴い実施された、稻木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は普通寺市稻木町下川原において昭和63年8月1日から昭和63年10月27日まで行い、平成元年3月31日まで市立郷土館において整理作業を実施した。
3. 調査は香川県知事平井城一から委託された稻木遺跡発掘調査団が実施した。調査団の組織は下記のとおりである。

團 長 普通寺市教育委員会 教育長 勝田 英樹
副團長 普通寺市文化財保護協会会长 杉峰 俊男
" 普通寺市立郷土館 館長 大西 義文
調査員 普通寺市教育委員会 文化振興室 笹川 龍一
調査補助 四国学院大学
指導 香川県教育委員会 文化行政課
事務局 普通寺市教育委員会 文化振興室

4. 本書の執筆は調査担当者である笹川龍一が行い、遺物の実測については四国学院大学学生他の協力を得た。
5. 遺構については、SH（堅穴住居）・SK（土坑）・SP（柱穴）・SD（溝）で表示した。また、遺構実測図中の矢印は全て磁北を指す。

目 次

刊行にあたって・グラビア・例言・目次		
第一章	遺跡周辺の地理と歴史	1
第二章	調査に至る過程	7
第三章	調査の概要	9
1.	各調査区の遺構と遺物 ①第1調査区	9
	②第2調査区	16
	③第3調査区	22
	④その他の遺構と遺物	41
2.	小 結	43
第四章	ま と め	44
図 版	46

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺遠景	1	第17図 SB-03 実測図	18
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	4	第18図 第3遺構面出土遺物実測図	19
第3図 調査地及び調査区配置図	7,8	第19図 第3遺構面出土遺物実測図	20
第4図 第1調査区東壁土層実測図	9	第20図 第3遺構面出土遺物実測図	21
第5図 第1調査区各遺構面実測図	10	第21図 第3調査区南壁西側	22
第6図 第1～3層出土遺物実測図	11	第22図 第3区第1,2層出土遺物実測図	23
第7図 SB-01・02実測図	12	第23図 第3調査区遺構配置図	23,24
第8図 SB-01 出土遺物実測図	12	第24図 第3区第3層出土遺物実測図	24
第9図 SH-01・SK-01 実測図	13	第25図 SD-01 出土遺物実測図	25
第10図 SK-01,第4層出土遺物実測図	14	第26図 SD-01・02出土遺物実測図	26
第11図 SR-01 土層実測図	14	第27図 SB-04 実測図	27
第12図 SR-01 東岸部出土遺物実測図	15	第28図 SH-03 実測図	27
第13図 第2調査区東壁土層実測図	16	第29図 SH-03 出土遺物実測図	28
第14図 SH-02 出土遺物実測図	16	第30図 SH-04 実測図	28
第15図 第2調査区各遺構面実測図	17	第31図 SH-04 出土遺物実測図	29
第16図 SH-02 実測図	18	第32図 SH-05 出土遺物実測図	30

第33図 SH-05 実測図	31	第45図 SH-12 出土遺物実測図	38
第34図 SH-06 実測図	31	第46図 SH-14 実測図	39
第35図 SH-06 出土遺物実測図	32	第47図 SB-06 出土遺物実測図	39
第36図 SH-07 出土遺物実測図	32	第48図 SB-06 実測図	40
第37図 SH-07 実測図	33	第49図 SH-15 実測図	40
第38図 SH-05 実測図	34	第50図 SH-16 出土遺物実測図	41
第39図 SH-08 実測図	34	第51図 SH-16 実測図	41
第40図 SH-09・SH-10 実測図	35	第52図 第3調査区土坑実測図	42
第41図 SH-09 出土遺物実測図	35	第53図 第3調査区土坑実測図	42
第42図 SH-11 実測図	36	第54図 第3調査区トレンチ配置図	43
第43図 SH-11 出土遺物実測図	37	第55図 TR-03 出土遺物実測図	43
第44図 SH-12・SH-13 実測図	38	第56図 参考資料・竈神	45

図 版 目 次

第57図 調査前の風景。第3調査区	48	第76図 SH-04 検出状況	57
第58図 発掘調査風景。第3調査区	48	第77図 SH-04 炭化物出土状況	58
第59図 第1調査区東壁土層	49	第78図 SH-04 ミニチュア土器出土状況	58
第60図 第1調査区第1造構面検出状況	49	第79図 SH-05 検出状況	59
第61図 第1調査区第2造構面検出状況	50	第80図 SH-06 検出状況	59
第62図 第1調査区第3造構面検出状況	50	第81図 SH-07 検出状況	60
第63図 SB-01 砥石出土状況	51	第82図 SB-05 検出状況	60
第64図 第4層遺物出土状況	51	第83図 SH-08・09・10 検出状況	61
第65図 SR-01 第5層遺物出土状況	52	第84図 SH-11 検出状況	61
第66図 SR-01 土層堆積状況・TR-01	52	第85図 SH-11 上層遺物出土状況	62
第67図 第2調査区第2造構面検出状況	53	第86図 SH-12・13 検出状況	62
第68図 第2調査区第3造構面検出状況	53	第87図 SH-14 検出状況	63
第69図 第3造構面遺物出土状況	54	第88図 SB-06 検出状況	63
第70図 TR-01 及び第2調査区土層	54	第89図 SH-16 検出状況	64
第71図 第3調査区全景	55	第90図 TR-04 設定状況	64
第72図 SD-01・SD-02 検出状況	55	第91図 遺物写真	65
第73図 SB-01 検出状況	56	第92図 遺物写真	66
第74図 SH-03 検出状況	56	第93図 遺物写真	67
第75図 SH-03 遺物出土状況	57	第94図 遺物写真	68

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

普通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。東は丸龜市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

普通寺市周辺に広がる丸龜平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に繩文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は繩文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、普通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図 調査地周辺遠景（左から大麻山・香色山・甲山・筆の山・我拝師山・中山・火上山）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡。善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木石川遺跡が続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連續性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られていた。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村庵寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の堅穴住居跡・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘立柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳などが発見され、特に弥生時代終末期の堅穴住居跡からはその廢

絶時の際記に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。また旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居跡や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。ここから北方に隣接するのが樅木遺跡である。樅木遺跡については、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年4月から昭和62年3月にかけて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が確認されている。

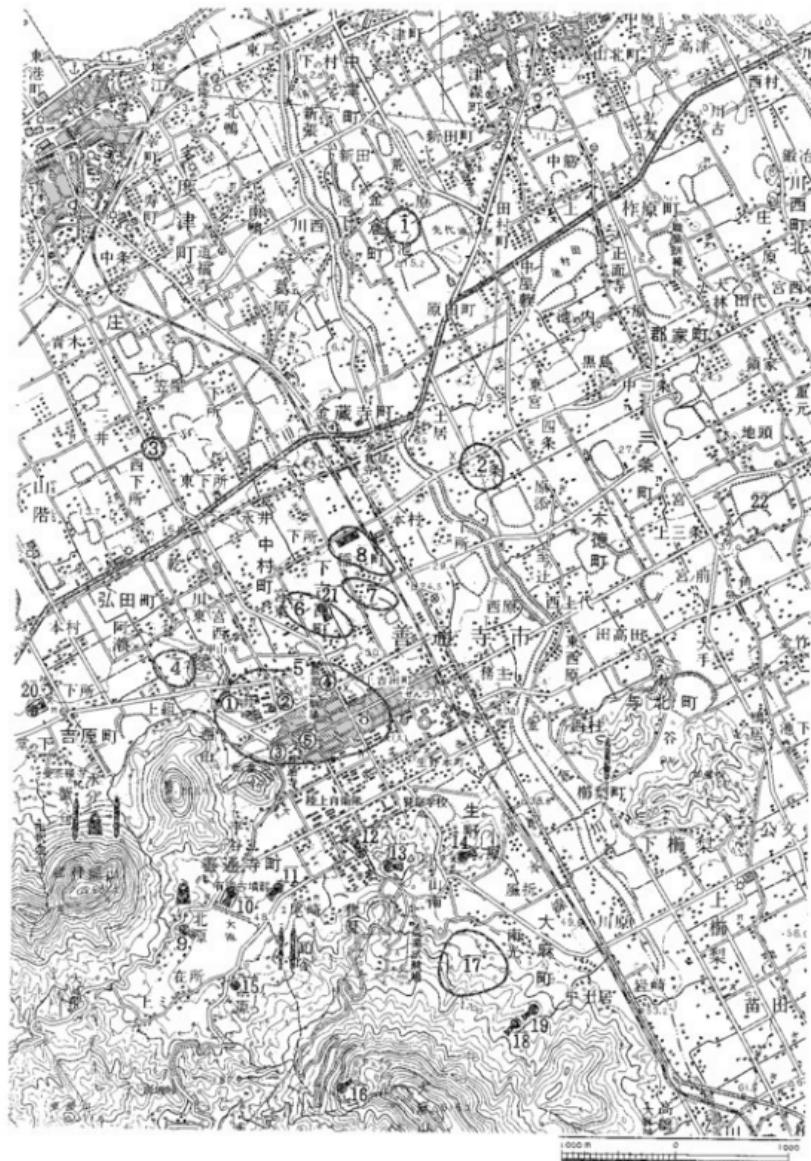
こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみると、いずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺には、“大きな町”というよりはむしろ“小国家”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口・大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口・北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

古墳時代に入てもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400墓を超える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず積石塚としては、大麻山経塚、大麻山椀貸塚、丸山1号・2号墳、野田院古墳、御忌林古

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|---------------|
| 1. 中ノ池遺跡 | ③善通寺西遺跡 | 9. 北原古墳 | 16. 野田院古墳 |
| 2. 五条遺跡 | ④仲村廃寺(伝導寺跡) | 10. 菊塚古墳 | 17. 岡古墳群 |
| 3. 三井遺跡 | ⑤善通寺伽藍 | 11. 王墓山古墳 | 18. 大麻山椀貸塚 |
| 4. 甲山北遺跡 | 6. 九頭神遺跡 | 12. 丸山古墳 | 19. 大麻山経塚 |
| 5. 旧練兵場遺跡 | 7. 石川遺跡 | 13. 鶴ガ峰4号墳 | 20. 青龍古墳 |
| ①被ノ宗遺跡 | 8. 樅木遺跡 | 14. 磨白山古墳 | 21. 下吉田八幡神社古墳 |
| ②仙遊遺跡 | ■樅木遺跡調査区 | 15. 宮ガ尾古墳 | 22. 宝幢寺跡(白鳳期) |



第2図 調査地と周辺の主要遺跡 (1 : 50,000)

墳、大庭ケルンなどが知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高 405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。有岡地区には、同一系譜上の首長墓群と考えられる 6 基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて磨臼山古墳・鶴ガ峰 4 号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚・北原古墳の順にならんでいる。古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻面で装飾された横穴式石室が計 8 基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が地域を代表する権力者として生まれ変わり、この様に数多くの古墳を築いたが、この権力者（豪族）層は、奈良時代には貴族層となる。この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓ではないかという見方がある。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺（伝導寺跡）が旧練兵場遺跡の一角に建立されている。しかしながらこの寺は間もなく焼失してしまい、その際に 500m 程南に移転されたものが現在の善通寺ではないかと考えられている。そして古代文化の中核であったこの地は門前町として繁栄を続け、現在に至っている。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸龜市教育委員会	1982年3月
『香川叢所・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	九頭神遺跡発掘調査団 善通寺市教育委員会	1988年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』
昭和58年度 香川県教育委員会 1984年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』
昭和59年度 香川県教育委員会 1985年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』
昭和60年度 香川県教育委員会 1986年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』
昭和61年度 香川県教育委員会 1987年3月

『県道西白方善通寺線改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
昭和61年度 香川県教育委員会
善通寺市 1987年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』 昭和61年度
第一冊 中村・乾・上一坊遺跡
香川県教育委員会
日本道路公团 1987年3月

『四国横断自動車道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告』 昭和61年度
第三冊 矢ノ塚遺跡
香川県教育委員会
日本道路公团 1987年10月

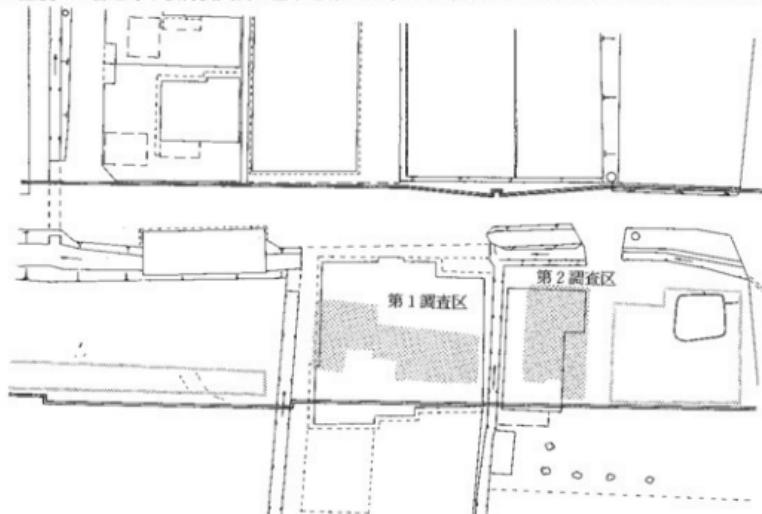
第二章 調査に至る過程

前章で述べたように古代から連綿と文化が栄え続けて来た善通寺市ではあるが、現代に至っての社会経済圏の発展には目覚ましいものがある。まず最初の段階は明治29年の第11師団設置に伴うものであり、この時門前町に軍都の性格を帯びるようになったが、道路・鉄道網の整備が行われたため、当時の善通寺町は昭和29年3月に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併し市制が施行され善通寺市が誕生している。

そして更に昭和62年12月16日に四国横断自動車道路（善通寺～豊浜間）が開通し、昭和63年4月10日に瀬戸大橋が機能し始めてからは、市内にインター・チェンジが設置されたこともあり善通寺市周辺は交通量が著しく増加し、閑静な田園都市善通寺市も從来の地域生活変遷の時期を迎えることに対応するため都市幹線道路や都市計画道路の整備が必要となり、現在国道11号と同319号バイパスを始めに、主要地方道の建設・改良工事が急がれている。

このうち、四国横断自動車道路の側道として整備が急がれていた県道西白方善通寺線では、昭和61年4月1日から昭和62年3月1日にかけて埋蔵文化財の発掘調査が実施されたが、整敷踏切除去工事の予定地区に約1,500m²の範囲が未調査部分として残されていた。

当該地の埋蔵文化財については昭和61年度に実施された調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺構がほぼ確実に遺存していると判断されたため、香川県教育委員会と県土木部道路課及び善通寺市教育委員会が慎重に協議を行い、これまでの調査で判明している遺跡の性格等を重視した善通寺市教育委員会が福木遺跡発掘調査團を編成し、埋蔵文化財発掘調査業務を受託



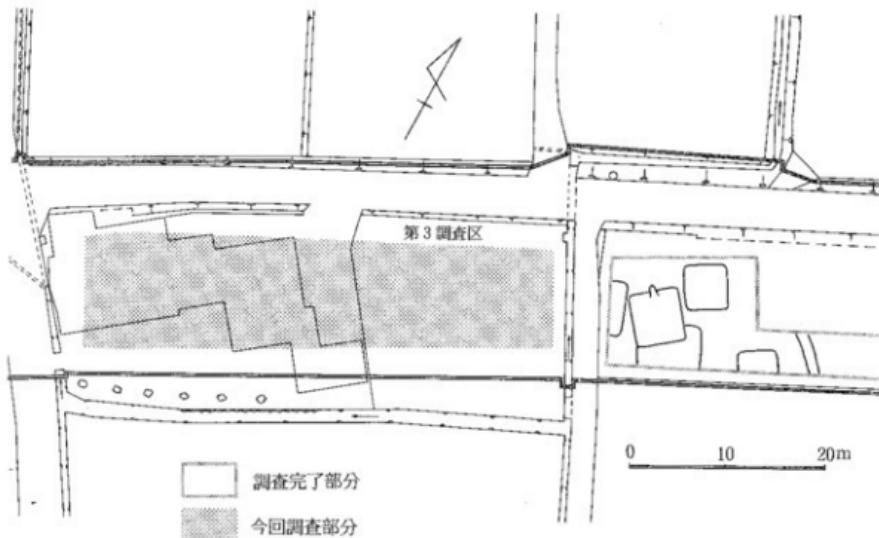
第3図 調査地及び調査区配置図

することになった。

調査対象区は東西に延びる西白方普通寺線の南側に沿って狭長な範囲であり、水路等で寸断されている部分を西から順に第1～第3調査区とし、重機による表土の除去作業を、昭和61年度の調査結果をもとに慎重に開始した。発掘調査予定範囲はいずれも調査直前まで住宅地であったため遺構破壊の懸念があったが、遺存状況は比較的良好であった。ただ、第1調査区と第2調査区では住宅の基礎コンクリートが一部深部まで及んでいたことからこれを避け、当初の調査予定面積をやや縮小することとなった。

昭和61年度の調査では、今回の調査予定地区の西端部で弥生時代後期末頃の遺物を多量に包含する自然流路が確認されており、また中央部では弥生時代後期末葉頃の竪穴住居跡が確認されていることから、この間に設定した第1～第2調査ではこの地形の変形点の存在が予想された。調査予定地区的東端部では古墳時代の竪穴住居跡群が検出されており、更にこの間に設定した第3調査区ではこれと同様の遺構の存在が予想されていた。

ただ、四国横断自動車道路建設に伴い昭和58年度に実施された稻木遺跡（B地区）の発掘調査は、当調査区から南方約200mで実施されているにもかかわらず、検出された遺構は8世紀代の建物群を中心に弥生時代の溝、9～10世紀頃の溝と建物群などであり、当該地区とは遺跡の内容が大きく異なることが確認されている。調査予定地区的西端部で確認されている自然流路は南東から北西に両遺跡間を寸断して流れているようである。



第三章 調査の概要

作業は発掘用資材の搬入作業を含めて昭和63年8月1日から開始した。調査区はいずれも住宅地であったが既に移転を完了しており、跡地には鬱蒼と夏草が生い茂っていたため、まず除草と杭打ち作業の後、平板による周辺地形の測量と並行して重機とダンプによる表土の除去作業を実施した。

発掘調査は約1,500m²という調査対象範囲と調査期間を考慮し、昭和61年度の調査結果等と併せて、調査不要と考えられる部分を残して第1調査区から作業を開始した。

1. 各調査区の主要遺構と遺物

以下、検出された遺構と出土した遺物を調査区ごとに解説する。

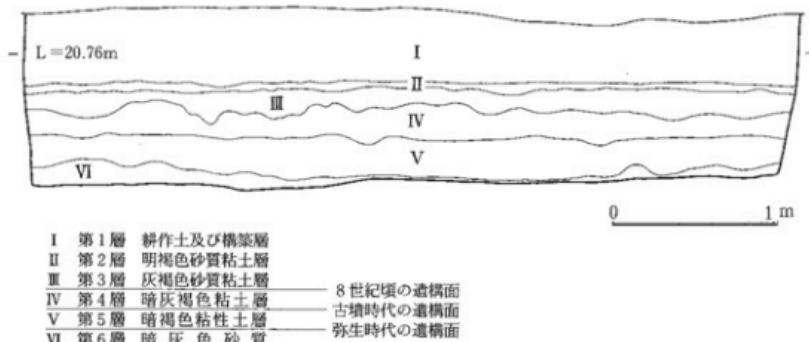
①第1調査区

第1調査区では厚さ約50cmの表土（第1層：耕作道及び構築層）と5cm程の明褐色砂質粘土層（第2層）、15cm前後の第3層（灰褐色砂質粘土層）を除去したところで第1遺構面が現われここで掘立柱建物跡が2棟検出されている。

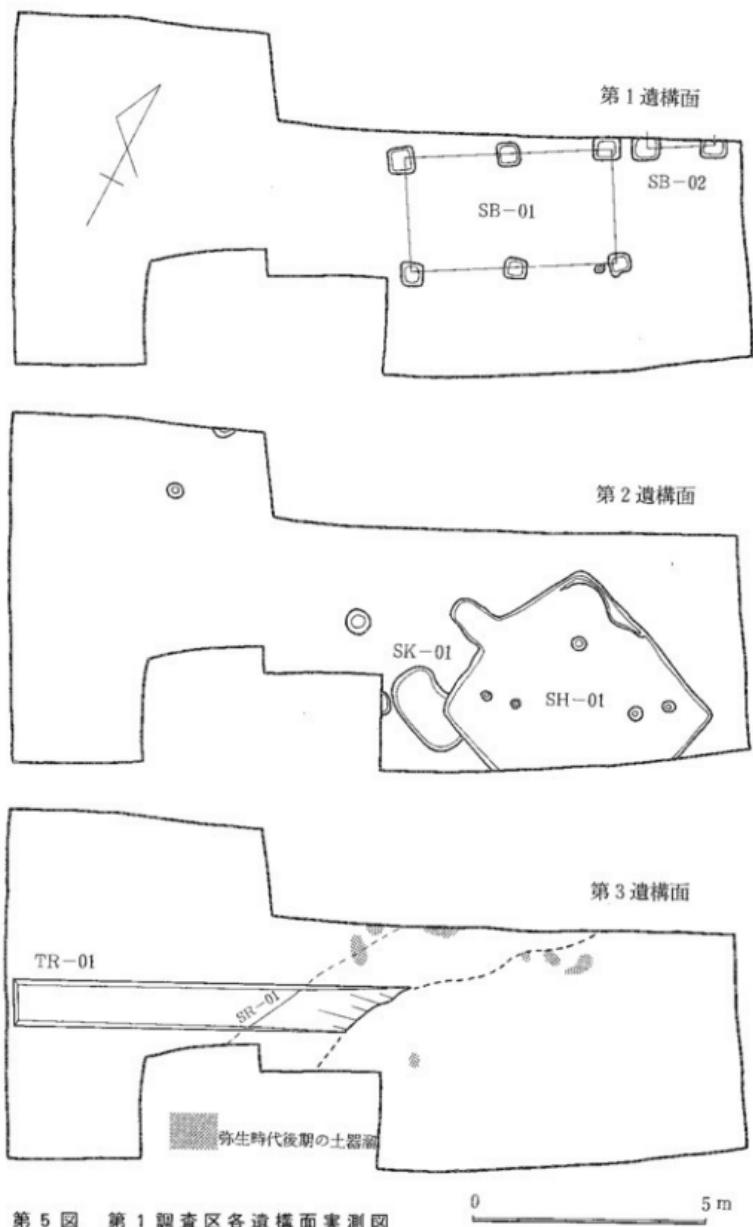
また厚さ20cm前後の第4層（暗灰褐色粘土層）を除去したところで確認された第2遺構面では、堅穴住居跡が1棟と土坑・柱穴等が検出された。更に40cm程の第5層（暗褐色粘性土層）を除去したところで暗灰色砂層の第6層（ベース）が現れたが、遺構は皆無であった。

第2遺構面と第3遺構面は第1調査区中央部から北西に向かって傾斜し下っていることが把握できていたため、第1調査区東壁沿いに水抜き溝を兼用したトレンチを設定し、これを確認し、第3遺構面の検出時と併せてトレンチを設定し、自然流路を確認した。

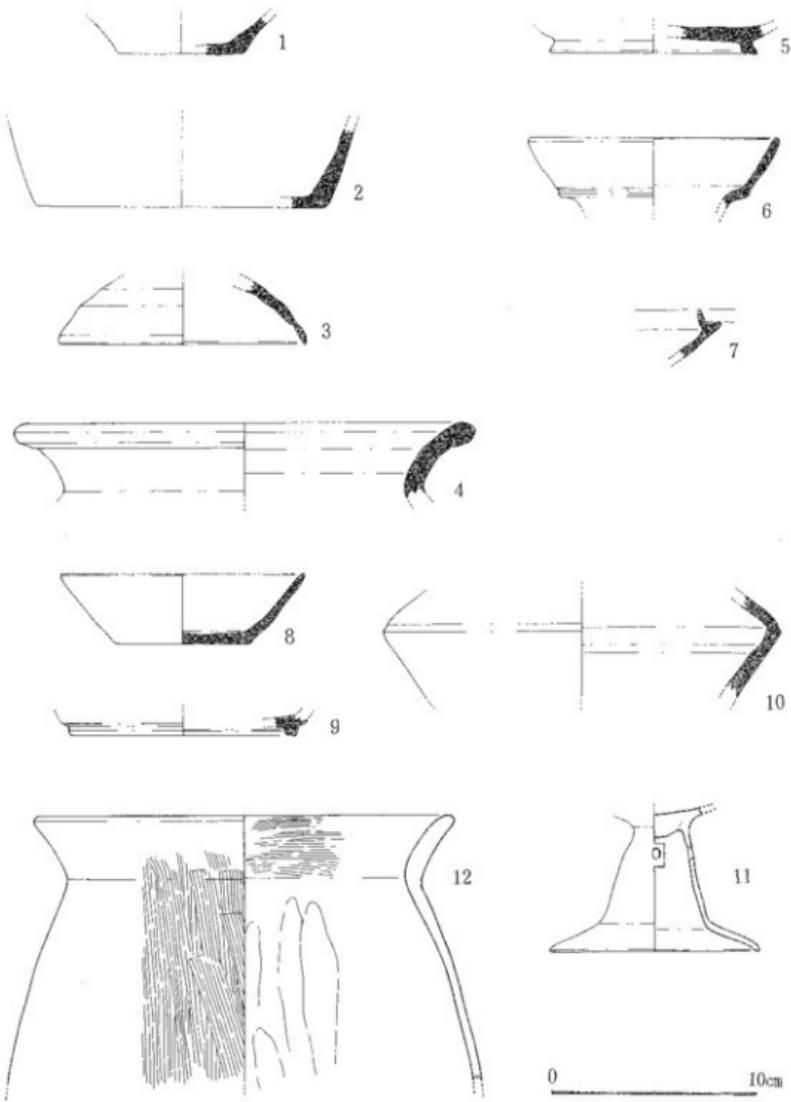
また、第1調査区東壁で確認された第1層から第6層までの土層序は、他の調査区でも共通しているようであり、これを当地区の基本土層としてとらえた。



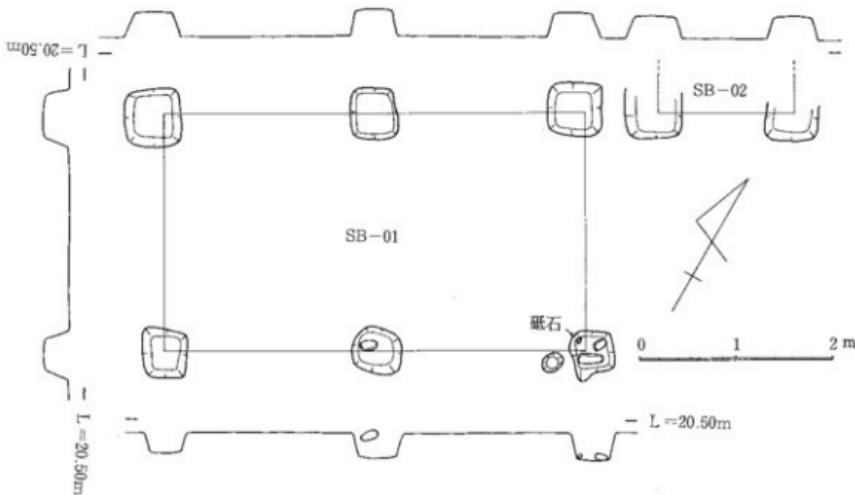
第4図 第1調査区東壁土層実測図



第5図 第1調査区各遺構面実測図



第6図 第1・2層及び第3層出土遺物実測図（1～7:第1・2層、8～11:第3層、12:第1造構面直上）



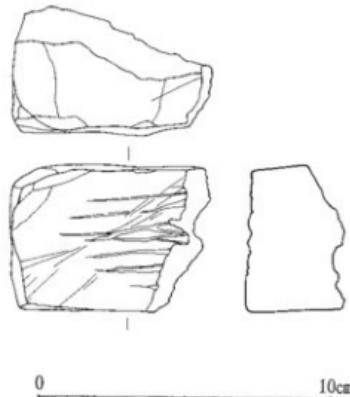
第7図 SB-01 : SB-02実測図

SB-01 SB-01は第1遺構面上において検出された掘立柱建物跡で、規模は1間×2間、主軸をN-30°～W前後にとる。柱穴は約60cm四方の方形で、深さ25～30cmを計る。このうち幾つかの柱穴からは10～15cmの河原石が出土しているが、南東隅の柱穴の底部からは使用痕が顕著な石英粗面岩製の砥石が出土している。

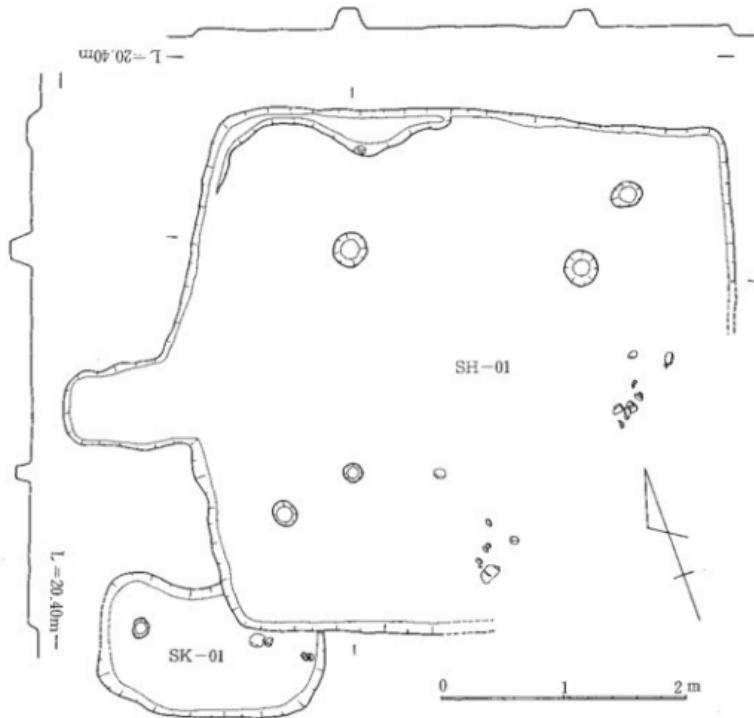
柱穴の埋土は第1遺構面上に堆積している第3層と同様で、この中には一部摩滅した弥生土器の他、8世紀頃までの須恵器等が含まれおり、奈良時代頃の所産ではないかと考えられる。

SB-02 SB-02は遺構の大部分が第1調査区北側に延びており、2個の柱穴しか検出されていないが、その遺存状況からSB-01と同時に建てられた同様の建物であると推定される。

規模は1間×数間で、主軸をN-30°～W前後にとり、柱穴は約60cm四方の方形で深さ25～30cmを計る。



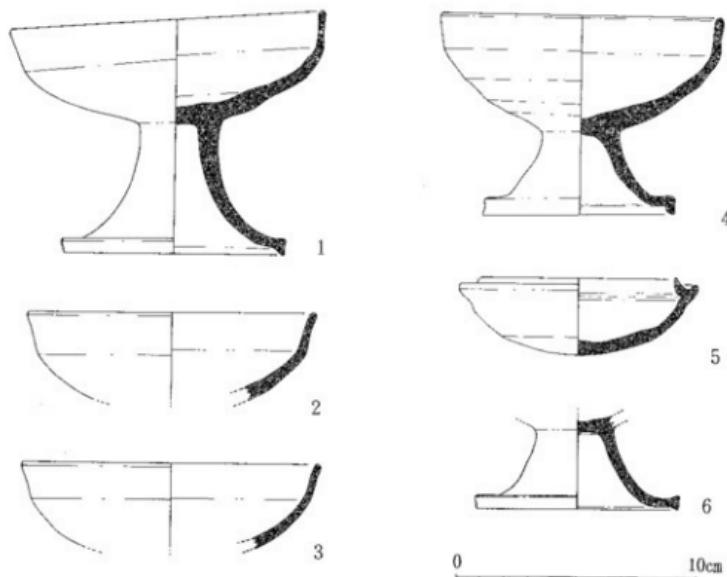
第8図 SB-01出土遺物実測図



第9図 SH-01・SK-01 実測図

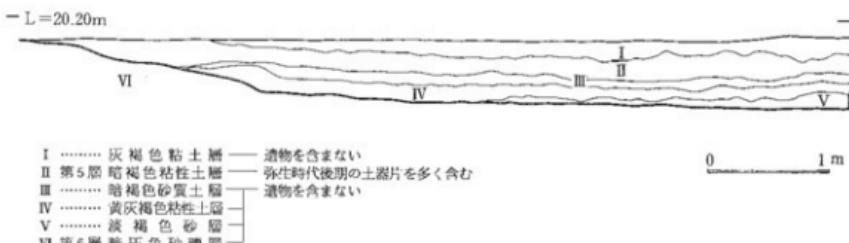
SH-01 SH-01は第2遺構面で検出された竪穴住居跡で、主軸方位はN-20°-Eを取り、規模は北東から南西に4.3m、北西から南東に4.5mを計るが、遺構面全体が削平されているようで、遺構の深さは10cm前後であった。特徴としては北西壁の中央部で竈の痕跡が確認されていることと、北隅部で壁溝があることがあげられるが、この埋土中からは弥生土器と須恵器片が少量出土しただけであり時期の特定は難しい。ただ、SH-01は古墳時代後期頃の須恵器が出土したSK-01を切っていることと、第2遺構面上に堆積している暗灰褐色粘土層（第4層）中から7世紀頃の須恵器の高杯がほぼ完形で出土していることから6世紀末から7世紀頃にかけての所産と考えられる。

SR-01 第2遺構面下に堆積している暗褐色粘土層（第5層）中には弥生時代の土器片しか含まれておらず、検出された第3遺構面が弥生時代頃のものであると考えられたが、部分的に下

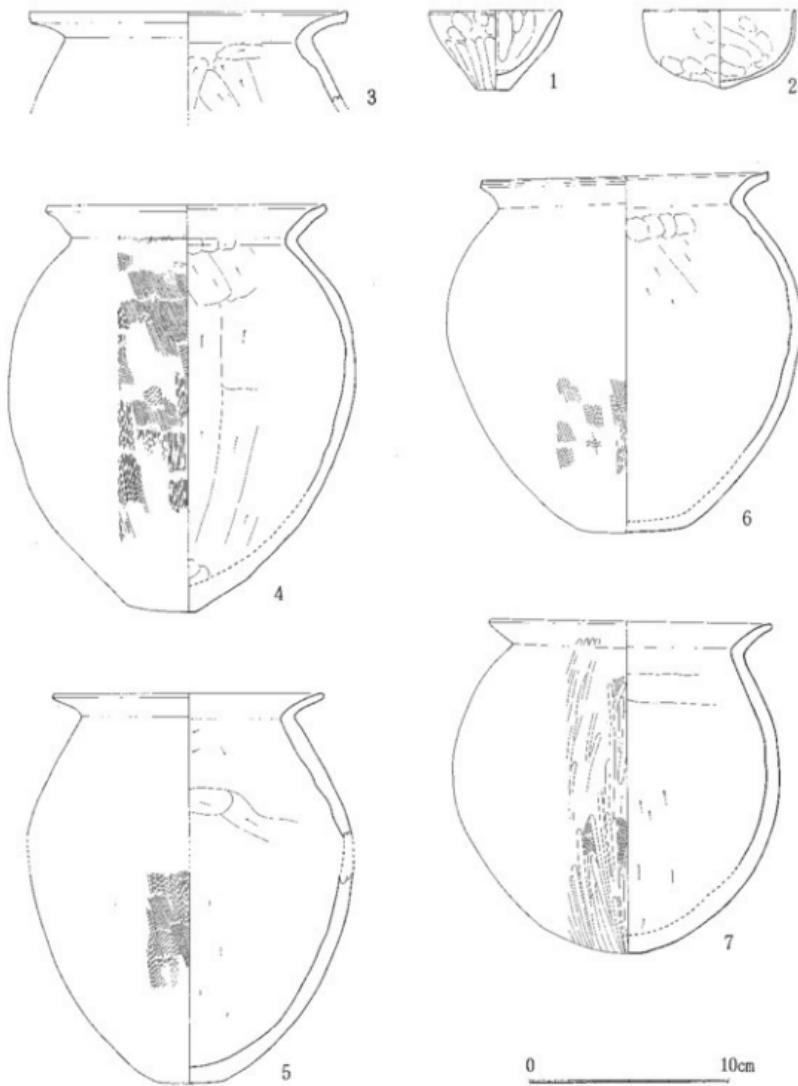


第10図 SK-01及び第4層出土遺物実測図（1～5：第4層、6：SK-01出土）

層の砂疊帶が顔を覗かせた部分に弥生土器の堆積が認められるものの具体的な遺構は確認されていない。しかしながら、第3遺構面は第1調査区のはば中央から北西に向かって落ち込んでいるらしく、一部にトレンチを設定したところ、これが旧河道の東岸であるが判明した。この旧河道の埋土中では、暗褐色粘性土層（第5層）中にのみ遺物が含まれており、東岸部で弥生時代後期末葉の甕が数点とトレンチの西端部で小型の鉢が2点出土している。トレンチの土層をみると、SR-01は除々に埋没していった様子がわかるが、暗褐色粘性土層（第5層）の堆積後は河川としての機能を殆ど失っていたようである。



第11図 SR-01 (TR-01南壁) 土層実測図

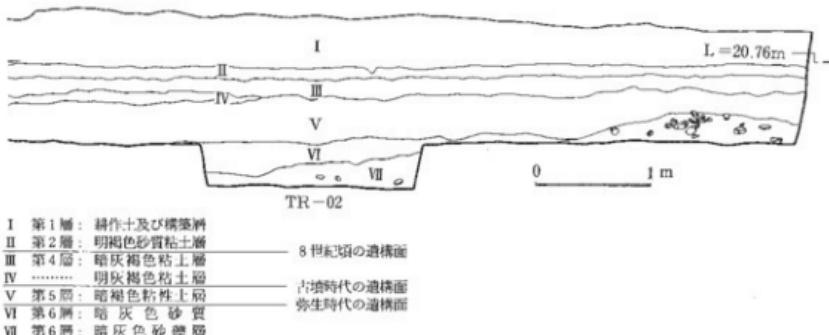


第12図 SR-01出土遺物実測図（1～2：SR-01中央部、6～7：SR-01東岸部出土）

②第2調査区

第2調査区では第1調査区で認められたような第3層（灰褐色砂質粘土層）の堆積は認められず、厚さ約50cmの第1層（耕作土及び構築層）と15cm程の明褐色砂質粘土層（第2層）を除去したところで第1遺構面が現れたが、ここでは遺構は確認されなかった。

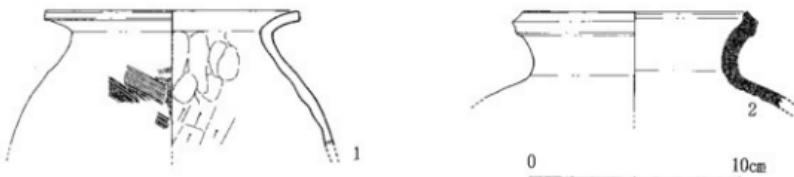
引き続き厚さ15~20cmの第4層（暗灰褐色粘土層）を除去したところで検出された第2遺構面では、竪穴住居跡が1棟と掘立柱建物跡が1棟確認された。更に40cm程の第5層（暗褐色粘性土層）を除去したところでは、部分的に自然堤防と推定される礫帯が突出した、比較的平坦な第3遺構面を形成する暗灰色砂層の第6層（ベース）が現われたが、水溜状の窪みと弥生土器の堆積が認められただけであり、ここに堆積している弥生土器に伴う遺構は第1~2調査区から南東方向に広がるものと推定される。



第13図 第2調査区東壁南側土層実測図

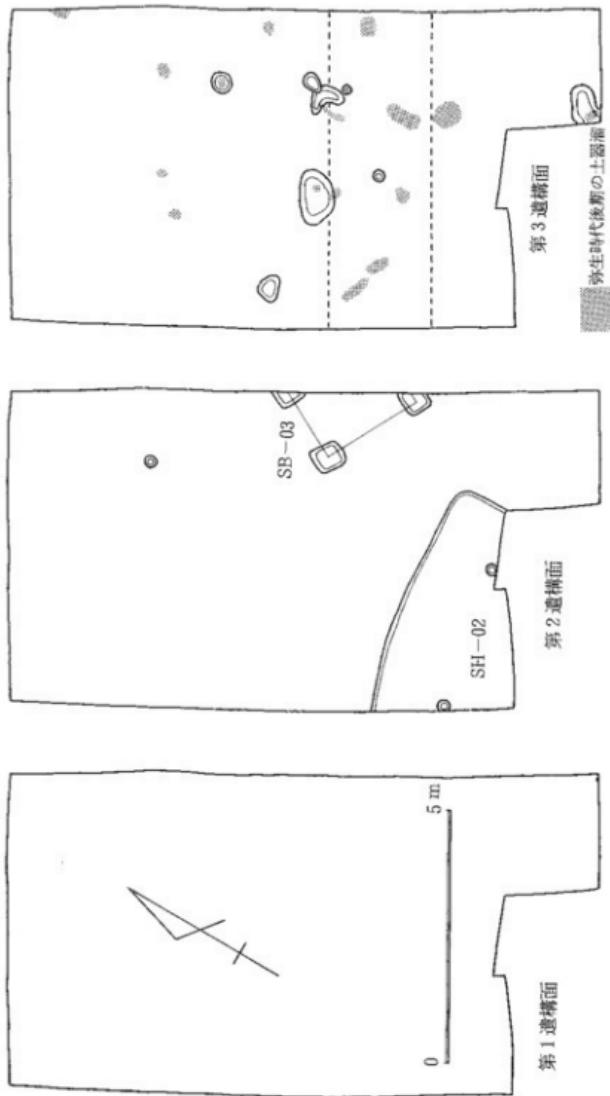
SH-02 SH-02は第2調査区第2遺構面南西隅で一部だけ検出された竪穴住居跡である。遺構は主軸方位をN~8°~Wに取っており、柱穴の位置等からみて、その規模は東西に約5mと推定される。

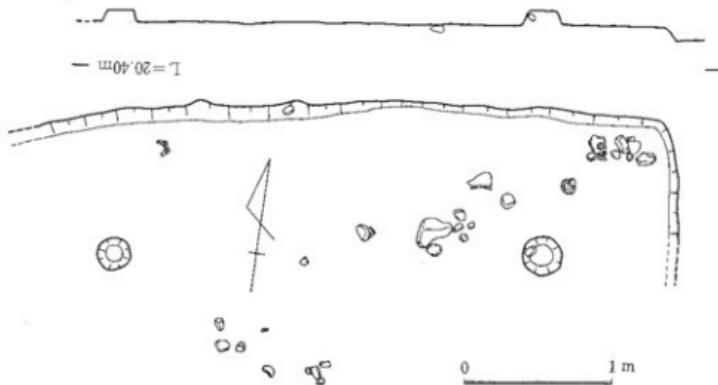
住居の埋土中には弥生時代後期末頃の土器片が多量に混入していたが、床面上から須恵器の壺の口縁部が出土しており、この遺物を検討した結果、古墳時代後期末頃の所産と考えられる。ま



第14図 SH-02出土遺物実測図（1：埋土中に混入 2：床面上出土）

第15図 第2調査区各遺構面実測図





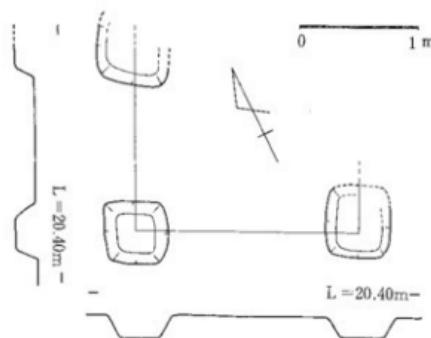
第16図 SH-02 実測図

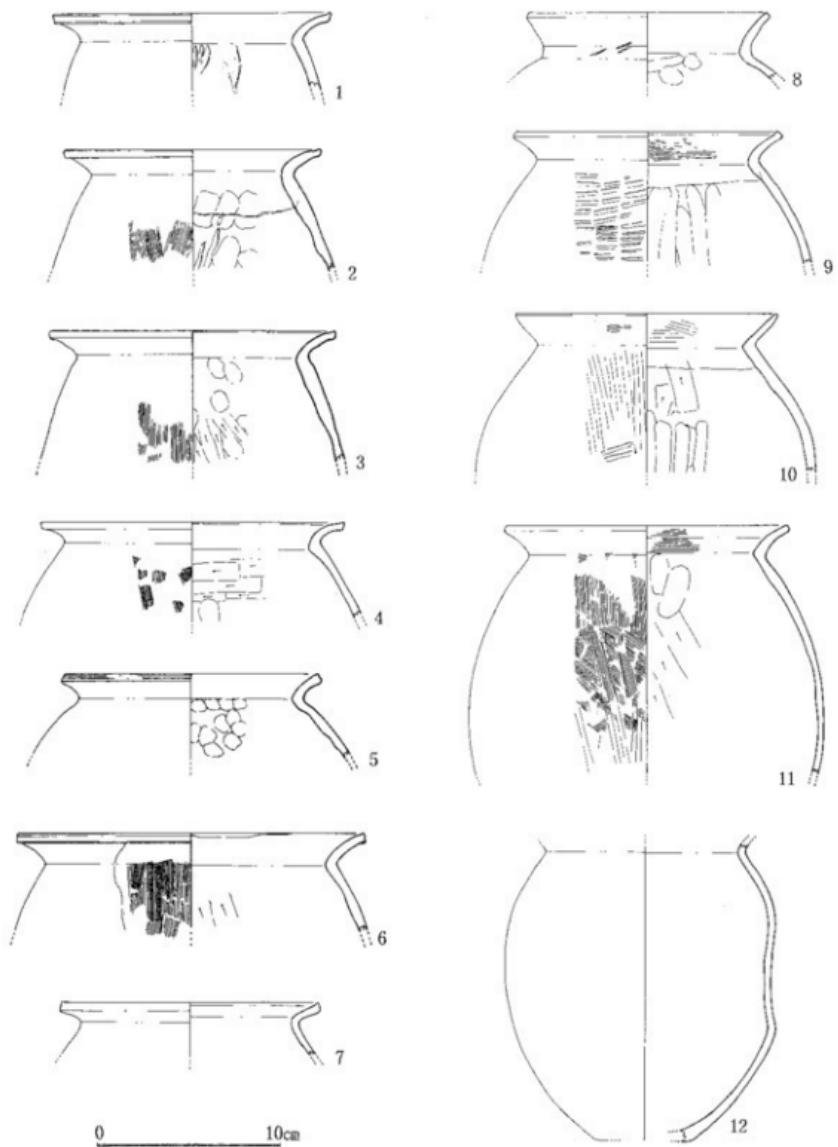
た、住居北壁中央部あたりで、焼土と炭火物が少量ではあるが検出されており、竈の存在も推定される。

SB-03 SB-03はSH-02の北東側で調査区の東壁中央部に沿って検出された、掘立柱建物跡である。遺構の主軸はN-26°-Eに取り、柱穴は約55~60cm四方の方形で、深さ20cm前後を計るが、壁沿いで検出であったため、正確な規模は不明である。

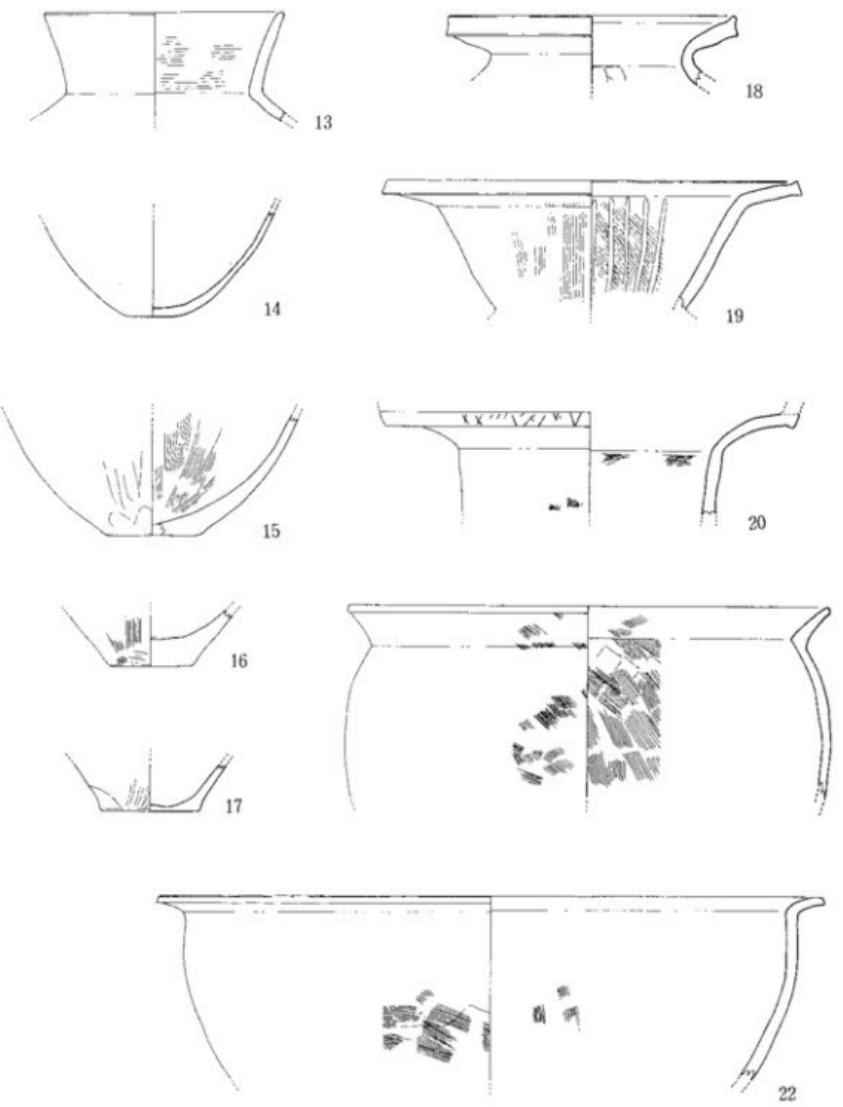
遺構の遺存状況等から古墳時代後期末頃の所産と推定される。

また、下層の第3遺構面上には水溜状の遺構の他には具体的な遺構の存在は確認できなかつたが、多量の弥生土器が土器窓となって堆積していた。弥生土器はいずれも後期末葉傾のもので、第1調査区でSR-01の東岸部から出土したものは甕ばかりであったが、ここでは甕を中心とし、高环、壺等様々な器形が出土している。

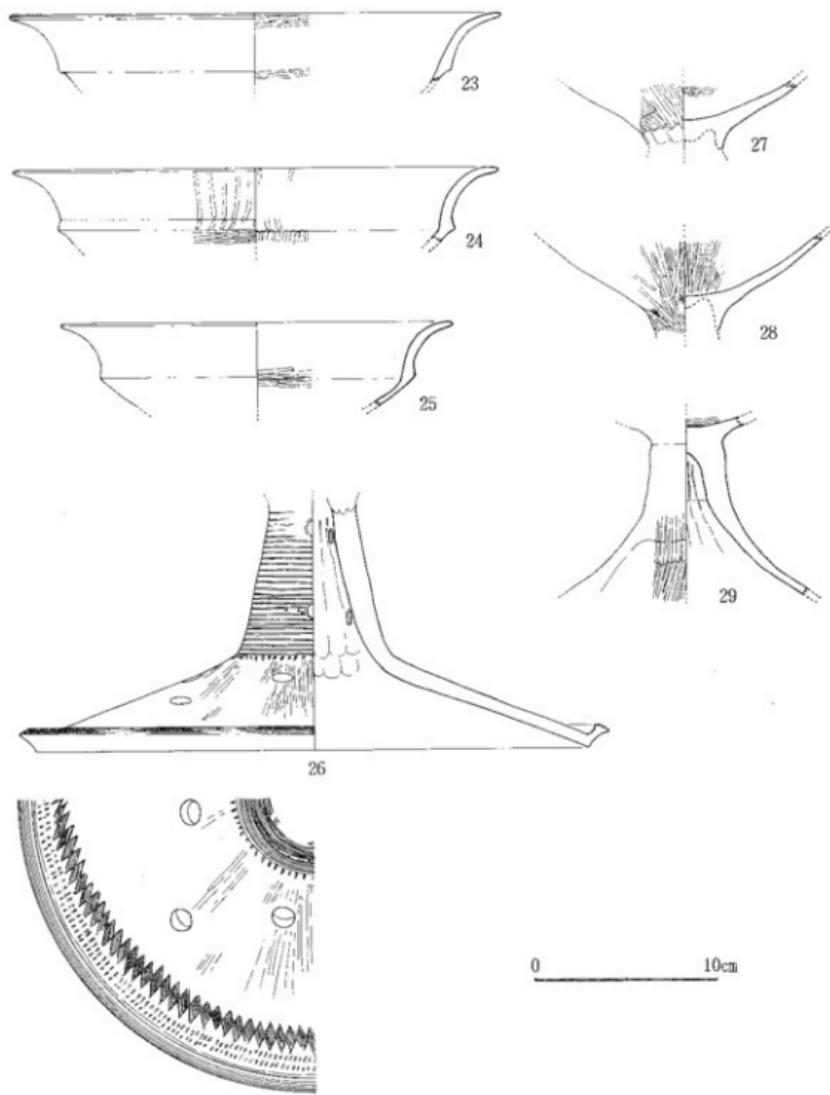




第18図 第3遺構面出土遺物実測図-①



第19図 第3遺構面出土遺物実測図-②



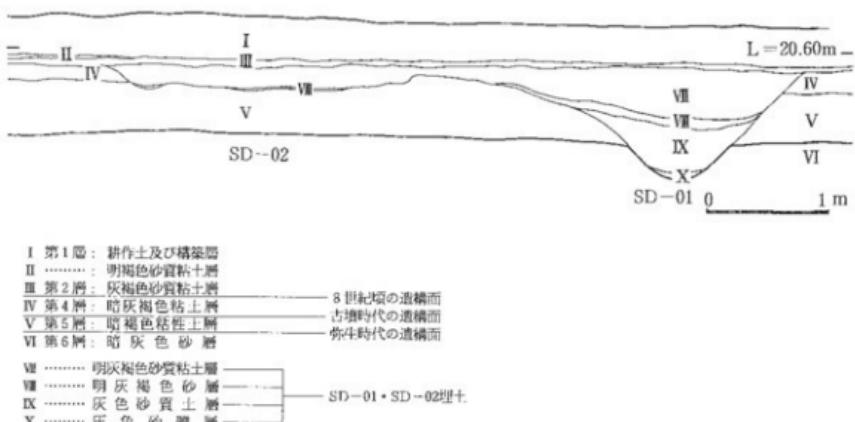
第20図 第3造構面出土遺物実測図 - ③

③第3調査区

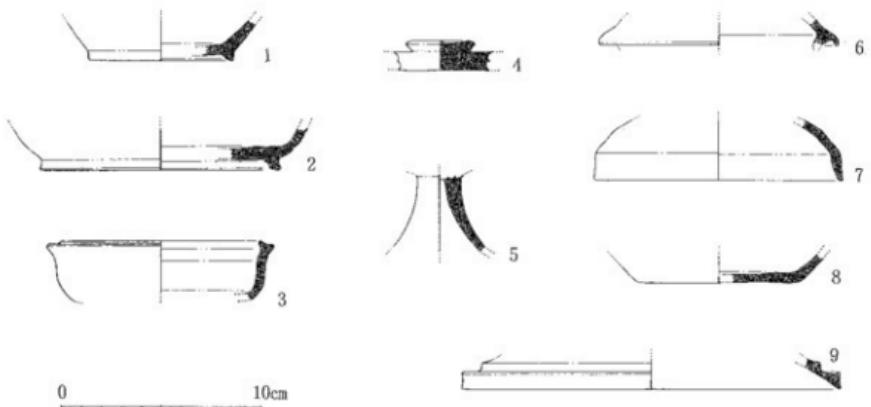
第3調査区は第1～第2調査区とは異なり木造家屋の跡地であったことから、基礎が浅く遺構の遺存状況は極めて良好であった。また層序についても、30～40cm前後の第1層（耕作土及び構築層）から更に3～8cm程の第2層（明褐色砂質粘土層）を除去したところで、8世紀頃のものと推定される遺構面が壁面土層の観察で確認されたが、全体がマンガンで濃褐色に変色しており遺構の判別が困難なため、この面の遺構は更に第4層（暗灰褐色粘土層）を除去した第2遺構面上で検出し、埋土によって時期を区別した。

主な遺構としては、調査区全域にわたって古墳時代の堅穴住居跡14棟・掘立柱建物跡1棟・多数の土坑と柱穴が確認された他、調査区西端では条里方位に直線的に流れる7～8世紀頃の水路と共に伴うテラス状遺構が検出されている。この水路は明らかに人工のもので、埋土中の遺物から8世紀頃には殆ど埋没していたものと考えられ、この水路を境として東に広がる掘立柱建物跡2棟と幾つかの土坑と柱穴についても、遺物や埋土等の状況からみて同時期の所産と考えられる。また、当遺跡は航空写真や地形図及び現地形等からみると、金倉川の氾濫原中に形成されたものであることがわかるが、遺構の密集状況等から当時の地形を考えると第3調査区あたりが中洲のピークではなかったかと思われる。

ここでは第1～第2調査区とは異なり、第5層（暗褐色粘性土層）中には弥生土器等は殆ど含まれておらず、第5層下に遺構が遺存している可能性は第1～第2調査区の状況からみても極めて低いため、第2遺構面調査完了後も全体は掘削せず、調査区の中央と各東西端にトレンチを設定して調査したところ、結果は3カ所ともに下層は暗灰色砂礫層となっており遺構が存在しないことが確認された。以下検出順に解説する。

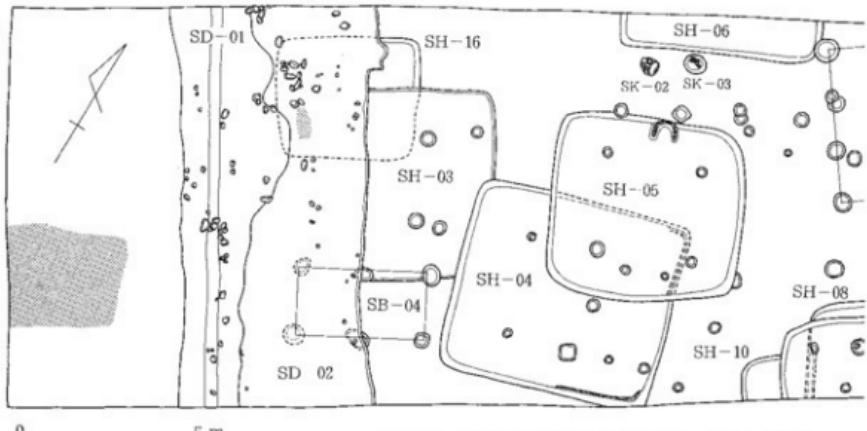


第21図 第3調査区南壁西侧（SD-01+02）土層実測図

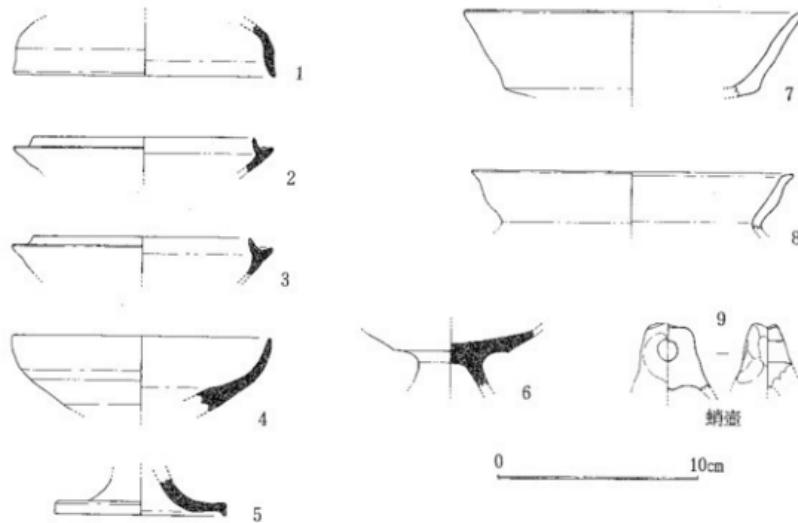


第22図 第3調査区第1～2層出土遺物実測図

SD-01・SD-02 第3調査区の第1～2層からは他の調査区と比較して8世紀頃までの須恵器が多く出土しているため、この時期の遺構の存在が考えられていたが、掘削を開始してすぐに調査区西端で条里方位(N-30°W)に流れる上幅1.6m～3.0m、下幅約30cmの逆台形の断面を呈する溝(SD-01)が検出された。遺構の最大上幅が3.0mを計る部分は崩落によるもので、当初は上幅は約1.5m程の直線的な形態であったと推定される。この溝の埋土は最下部からX：灰色砂礫層、IX：灰色砂質土層、VII：明灰褐色砂層、VI：明灰褐色砂質粘土層となっていたが、VII層を中心に一部VII層のみから出土しており、X層とIX層には遺物は全く含まれていなかった。

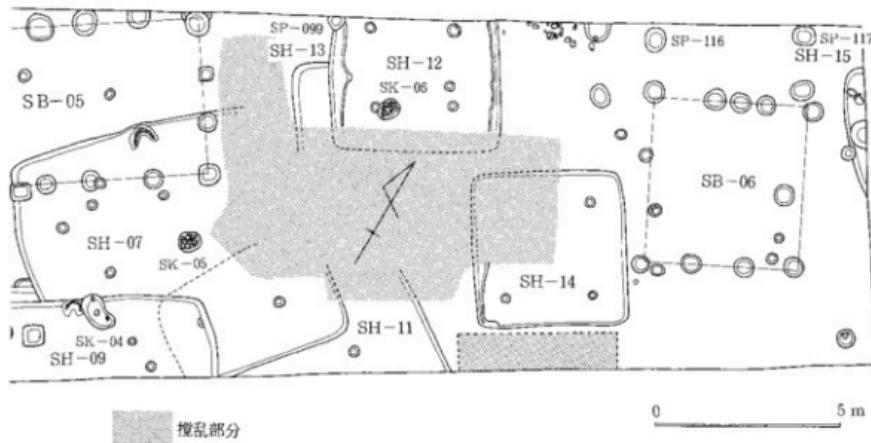


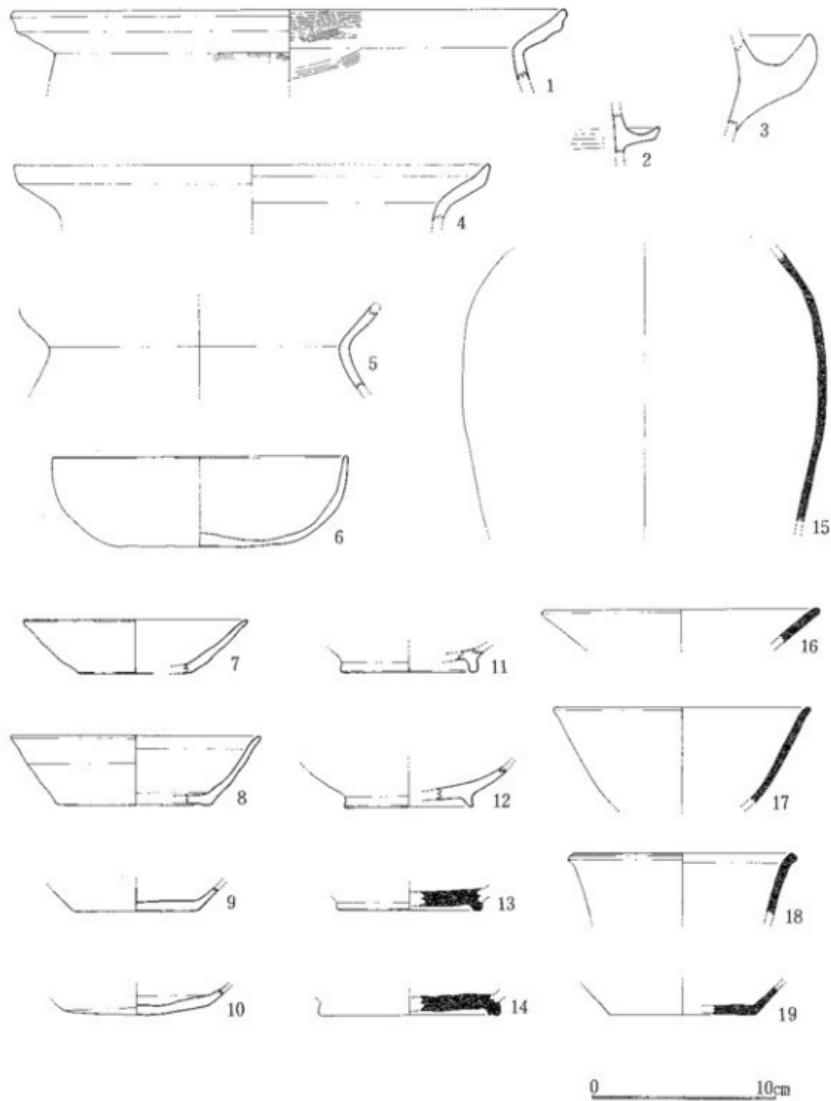
第23図 第3調査区遺構配置図(第1、第2遺構面)



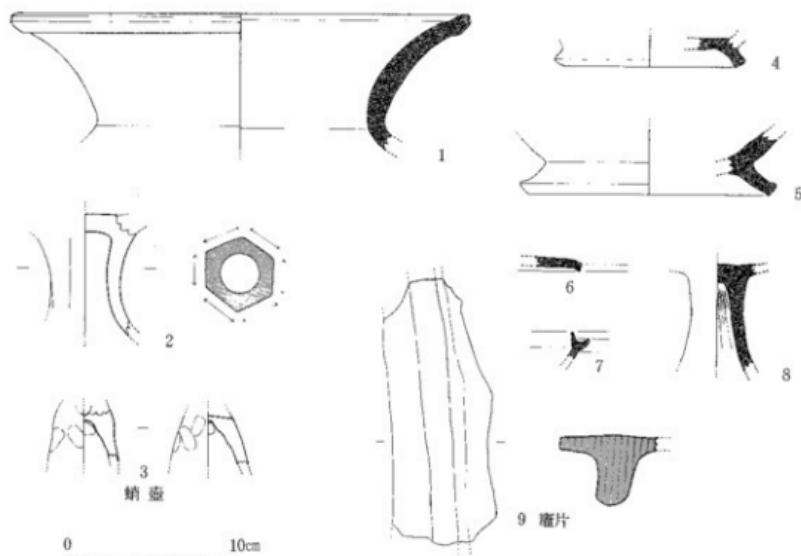
第24図 第3調査区第4層出土遺物実測図

出土した遺物は一部摩滅した弥生土器の他、古墳時代の土師器・須恵器、8世紀頃の土師器・須恵器等であり、この遺構は奈良時代以前に構築され、奈良時代末には埋没し機能しなくなっていたようである。8世紀頃の土師器の高环で、面取りした六角形の頭部に赤色顔料を塗布したものが出土している。





第25図 SD-01 出土遺物実測図



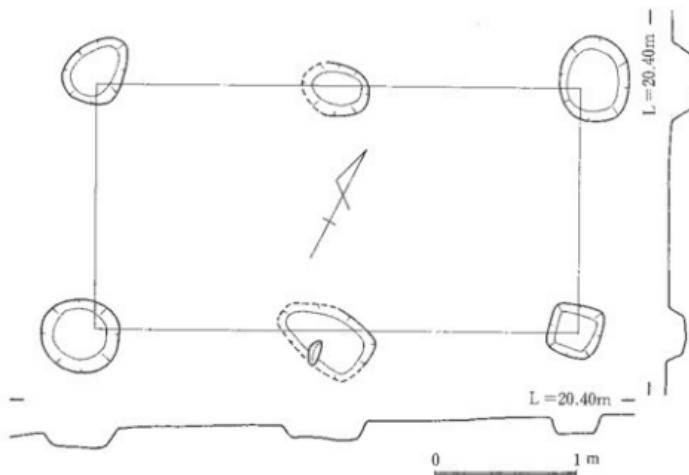
第26図 SD-01・SD-02 出土遺物実測図 (1～3 : SD-01、4～9 : SD-02直上出土)

また、SD-01の東側肩部にこれと並行して遺存している幅3～3.5mの平坦なテラス状の浅い溝状遺構(SD-02)が検出されている。この平坦部には10～30cm程の河原石が多数散乱していたが、SD-01中層に堆積していた石についても当初はSD-02上にあったものが転落したものと推定される。SD-02上からは甕片を始め、8世紀頃の土師器・須恵器片が多数出土している。

SD-02の性格については、ここから東側に同時期の掘立柱建物跡・土坑等が遺存していることから水辺の作業場、若しくは遺構が直線的なプランを呈していることから水路に伴う道と考えられるが、詳細は不明である。

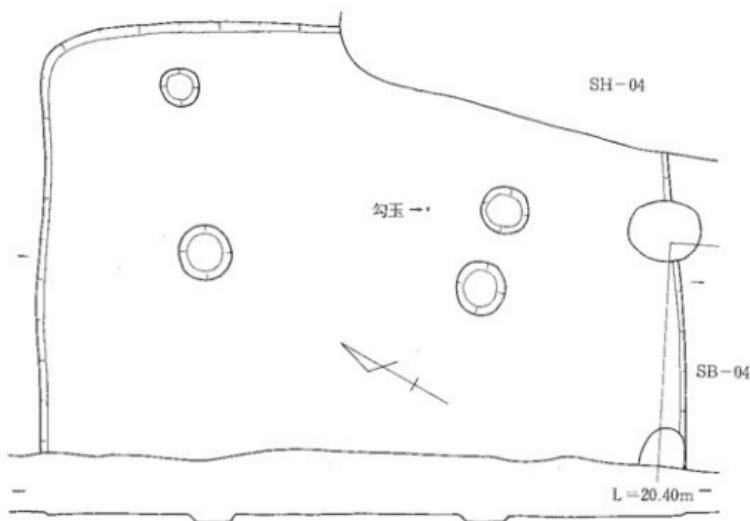
SB-04 調査区西端で検出された掘立柱建物跡で、規模は1間×2間、主軸はN-26°-Wに取るが、計6個の柱穴は約40cm四方の方形や直径40～60cmの円形等様々で一定していない。柱穴の深さはいずれも15cm前後と浅く、周辺の堅穴住居跡等の遺存状況からみても、本来の遺構造面はかなり削平されているようである。

SB-04は遺構の切合関係から、古墳時代前期頃の堅穴住居跡(SH-03)以後で奈良時代の溝(SD-01、SD-02)以前のものであることがわかる。古墳時代中期から後期頃の所産ではないかと考えられる。



第27図 SB-04 実測図

SH-03 主軸方位をN-31°-Wに取る方形の豊穴住居跡で、西半分がSD-02によって消滅しているために正確な規模は不明であるが、南北に 5.2mを計ることから、東西の規模もこれと



第28図 SH-03 実測図

0 1 m

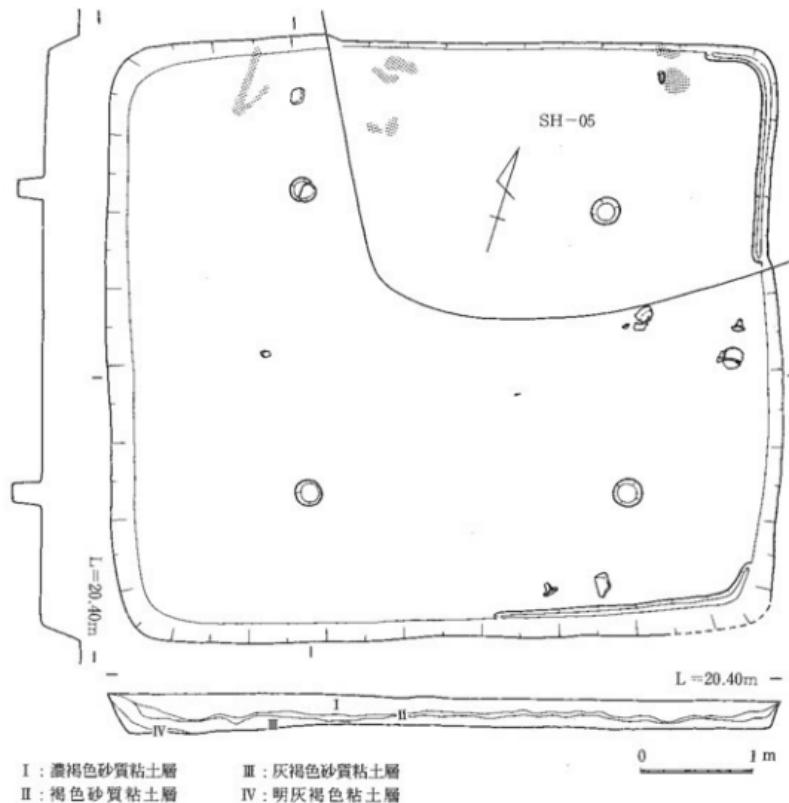
同等ではないかと推測される。

遺構の深さは数cm程で上部は殆ど削平されてしまっているが、床面上から半透明な濃緑色の硬玉製勾玉が出士している。勾玉以外の遺物は全く出土していないため時期を明確にできないが、SD-02との切合関係や遺構の南西部を古墳時代でも比較的古い時期の竪穴住居跡（SH-04）に切られていることから、古墳時代前期初頭頃の所産ではないかと考えられる。

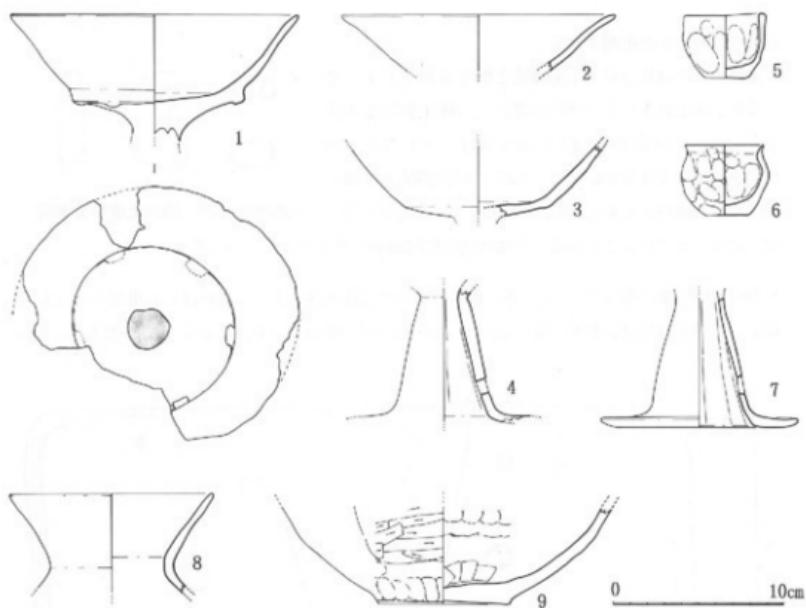
SH-04 主軸方位をN-17°Wに取る方形の竪穴住居跡である。廃絶後に北東部分がSH-05によって切られてはいたが、SH-05の床面がSH-04の床面よりも浅く造られていたため、その



第29図 SH-03出土遺物実測図



第30図 SH-04 実測図



第31図 SH-04 出土遺物実測図（1～9：第II層出土）

床面下層部分を含めてほぼ全体が検出できた。

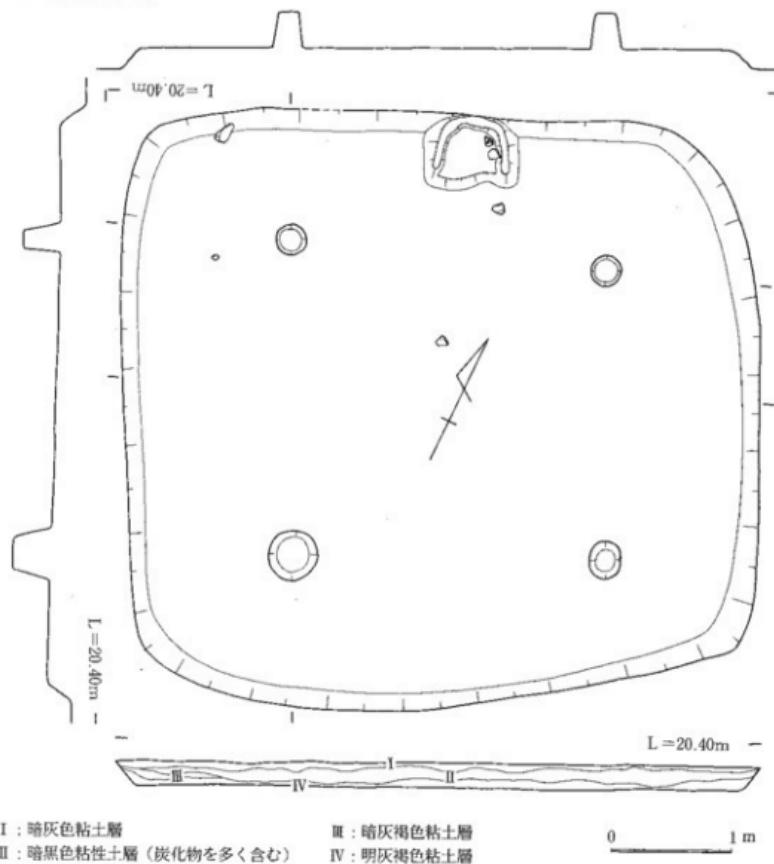
規模は東西に 5.7m、南北に 5 m、深さは25~35cmを計り、それぞれのコーナー寄りに比較的小振りの柱穴を計4個設定しているが、このうち北西側のものには柱材を抜き取った後に30cm程の細長い河原石が押し込まれていた。

また、この住居の埋土は下層からIV：明灰褐色粘土層、III：暗灰褐色粘土層、II：暗黒色粘性土層、I：暗灰色粘土層となっているが、IV層～III層中には土器片等が全く含まれておらず、住居の竪穴部を掘削する際に一度掘り下げた後に改めて客土し、床を張りなおしたものではないかと考えられ、生活面はIII層上面とみられる。

III層上に堆積しているII層中には極めて多くの炭火物と共に、二次的に火を受けた痕跡が認められる土師器が多数含まれていたため、焼失家屋ではないかと推定されたが、葉状の植物体や小枝の炭化したものは認められたものの、主な柱材の炭化物は全く認められない。また、北西側の柱穴の遺存状況やII層中に含まれる遺物の中に複数のミニチュア土器が含まれていることなどから検討した結果、SH-04はその廃絶時に解体され、再利用可能な柱材等を持ち去った後に野ざらしとなった竪穴内で屋根等の廃材を焼却したのではないかと推定される。またミニチュア土器等

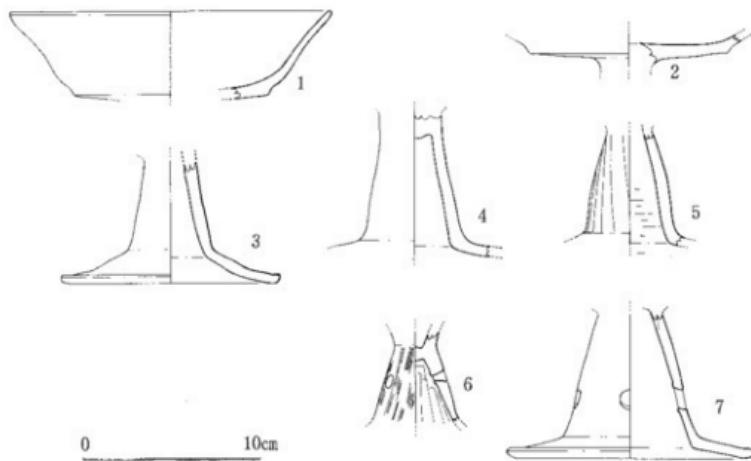
の出土からは、廃絶に伴い何らかの祭祀が行われたことも考えられる。

出土した土師器等の遺物を検討した結果、SH-04は古墳時代でも比較的古い時期に機能し廃絶したと推定される。



第32図 SH-05 実測図

SH-05 SH-05は主軸方位をN-25°-Wに取るやや隅丸の方形の堅穴住居跡である。埋土のうちI～III層中からは土師器片が多数出土しているが高环が多い。須恵器等は全く出土しておらず、構造が構築された時期等を特定することは難しい。しかしながら古墳時代前期頃と推定されたSH-04を切っていることと、須恵器が全く出土していないことをみると、須恵器出現以前の所産である可能性も考えられることから、古墳時代前期後半頃から中期中頃まで機能していた



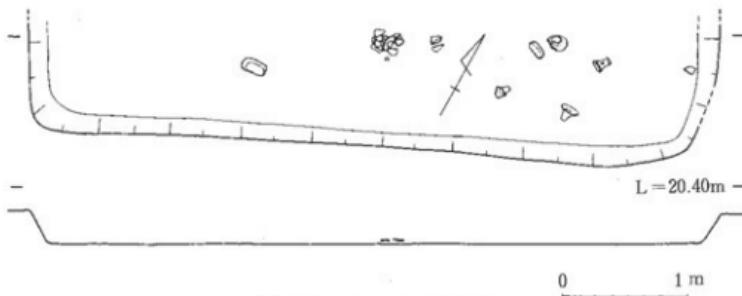
第33図 SH-05 出土遺物実測図（1～7：第I～II層出土）

と考えられる。

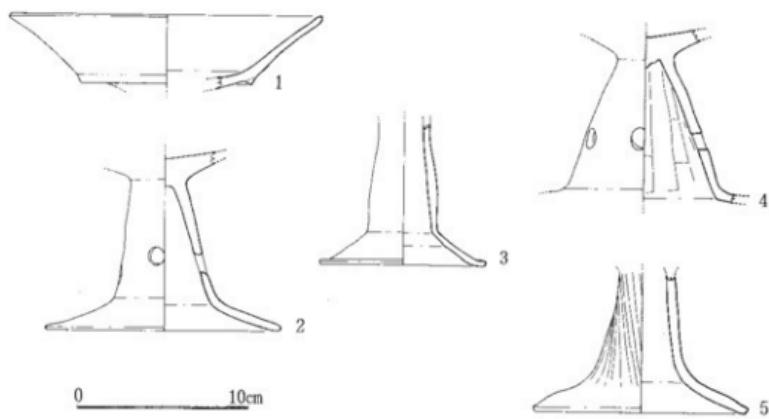
埋土最下層の明灰褐色粘土層はSH-04のものと良く似ており、また住居内北壁中央部に造り付けられた竈の前面に堆積している炭化物や焼土はいずれもIV層上に堆積しており、IV層上が生活面であったことを裏付けできる。

またSH-03からSH-05及び後述するSH-16については、恐らくごく近い時期に相次いで構築されたものと推定される。

SH-06 主軸方位をN-26°-Wに取る方形の竪穴住居跡である。調査区北壁沿いで検出されたため、規模については東西に 5.5m、深さが25cm程であること以外詳細は不明である。



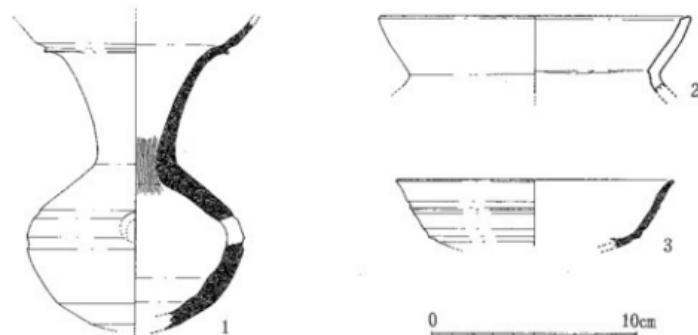
第34図 SH-06 実測図



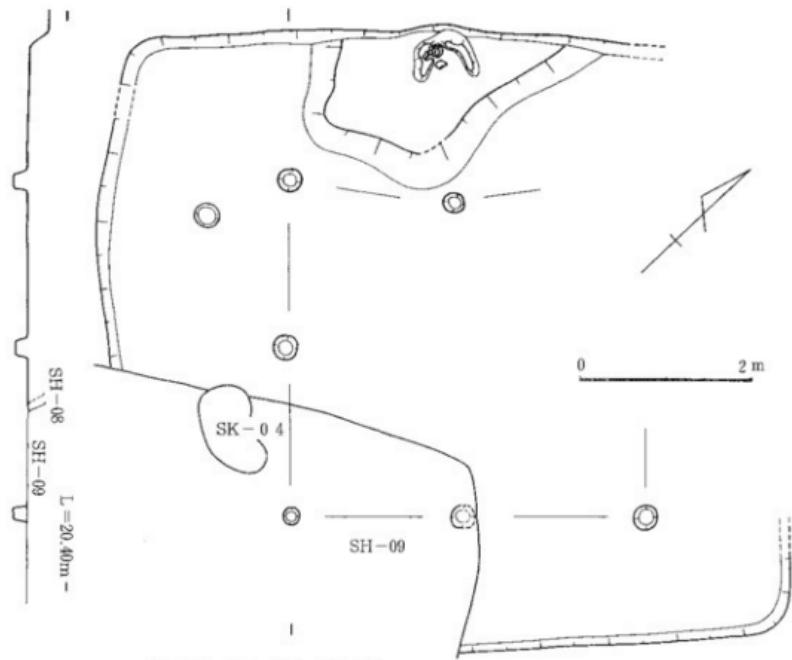
第35図 SH-06 出土遺物実測図

造構の埋土は黒褐色粘土層で下層部に土師器片が多数堆積していたが、器種の大半はSH-05同様高环ばかりであり、他に須恵器等の遺物は認められなかった。出土遺物等から古墳時代前期初頭に機能し廃絶したと考えられる。

SH-07 主軸方位をN-47°Wに取る方形の堅穴住居跡であるが、SH-07は南西隅をSH-08とSH-09によって切られ、北東部は擾乱を受けているが、北西部の大半と南東隅が検出されたため、東西に8m、南北に7.5mという比較的規模の大きい堅穴住居跡であることが確認された。



第36図 SH-07 出土遺物実測図 (1: 瓦、2~3 埋土出土)



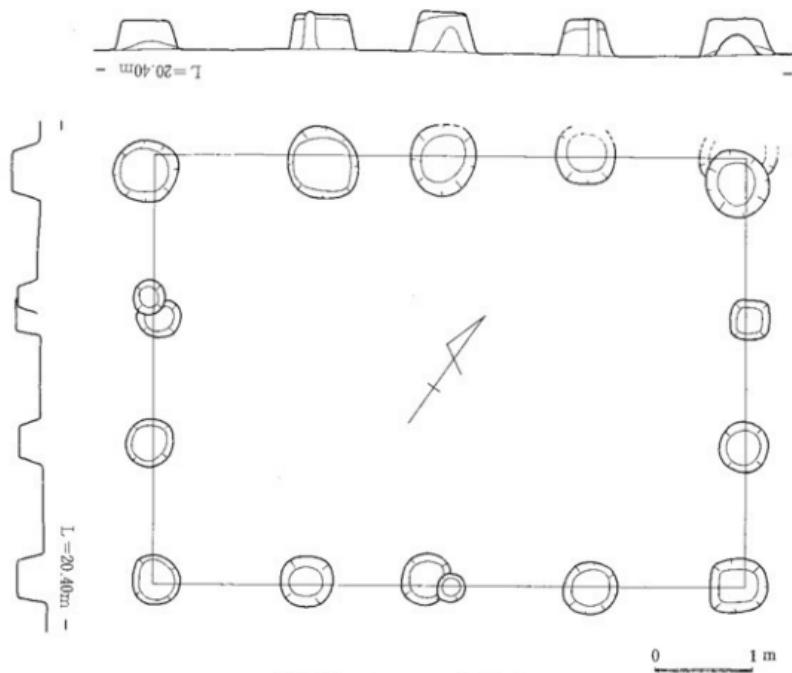
第37図 SH-07 実測図

遺構面が掘平されてしまっているために遺構の深さは25cm程と浅いが、柱穴は床面上で7個検出されている。住居の規模が大きいため、各隅部寄り計4カ所の他、それぞれの柱の間の計8個設定されているようである。

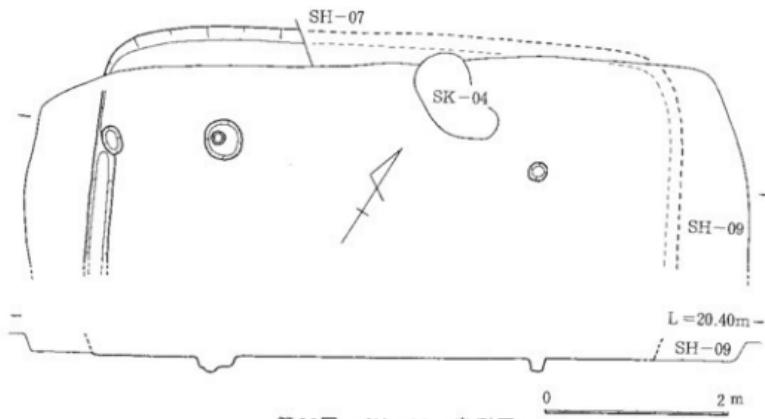
住居の北壁中央部には竈が造りつけられていたが、内部には甕が伏せて置かれており、その出土状況から竈が壊された後に置かれたことがわかる。住居の廃絶に伴い甕で行われた祭祀の痕跡かと考えられる。遺構の埋土は暗灰褐色粘土層で、出土した遺物等を検討した結果SH-07は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。

SB-05 3間(4.4m)×4間(6.1m)の規模で、主軸方位をN-4°-Wに取る掘立柱建物跡である。柱穴は直径40cm~80cmの円形から、40cm四方の方形まで様々であり一定していないが、大形の柱穴埋土中には柱痕を残すものも認められた。柱穴中からは須恵器や土師器の小片が出土しただけであるが、同様の遺構であるSB-06出土遺物や埋土の内容からみて7~8世紀頃の所産であり、SD-01~02と関連した遺構と推定される。

SH-08 主軸方位をN-26°-Wに取る方形の竪穴住居跡である。SH-08はSH-07・SH-09と重なっているため遺構の大半が削られており、北西隅の一部が検出されただけであったが、SH-



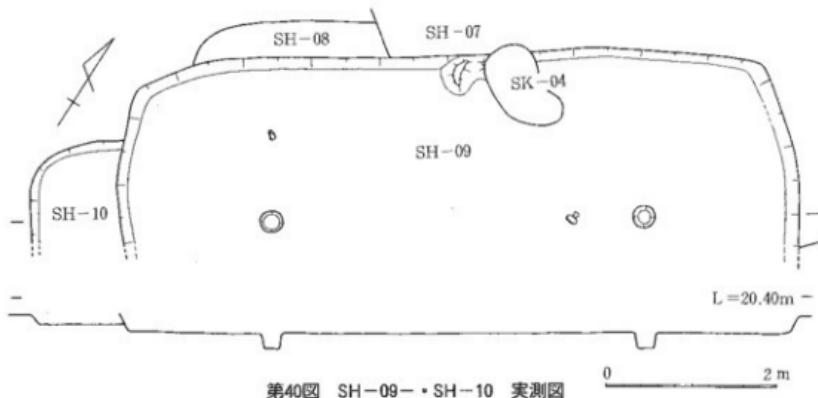
第38図 SB-05 実測図



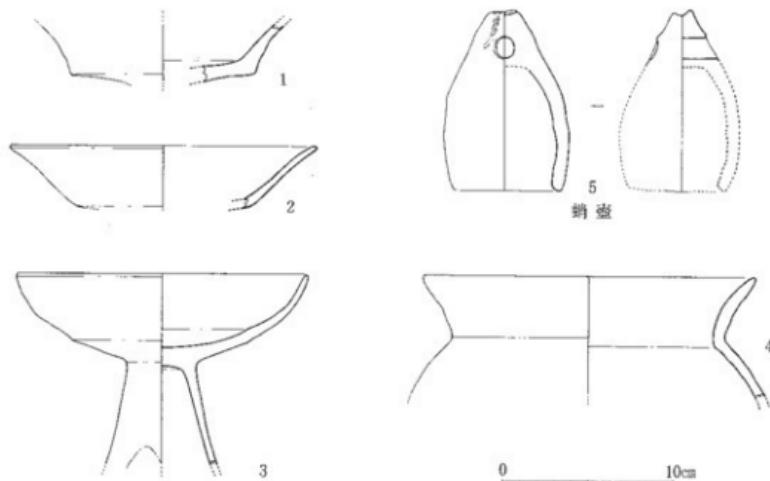
第39図 SH-08 実測図

09よりも床面が深かったことから、SH-09の床面調査後に下層で柱穴2個と併にSH-08の床面が検出された。東西に6.5m程の規模でやや隅丸の方形を呈しているようである。

遺構の埋土は黒褐色粘土層で、埋土中からはわずかに土器片が出土しただけであるため、他の遺構との切り合い関係からみて古墳時代中期頃の所産と推定される。



第40図 SH-09・SH-10 実測図



第41図 SH-09 出土遺物実測図 (1~4: 埋土上層、5: 埋土上層出土)
※1, 2は比較的古い特徴を呈しており混入したものとみられる

SH-09・SH-10 SH-09は主軸方位をN-32°-Wに取る方形の竪穴住居跡である。調査区南壁沿いで検出であったため、遺構の北約3分の2は調査区外にあり全体の規模は不明であるが、東西に約8mと比較的大型である。また住居北壁中央部には竈が造り付けられており、中から竈で使用されていたとみられる、火で焼かれ赤く変色した土師器の壺が出土している。

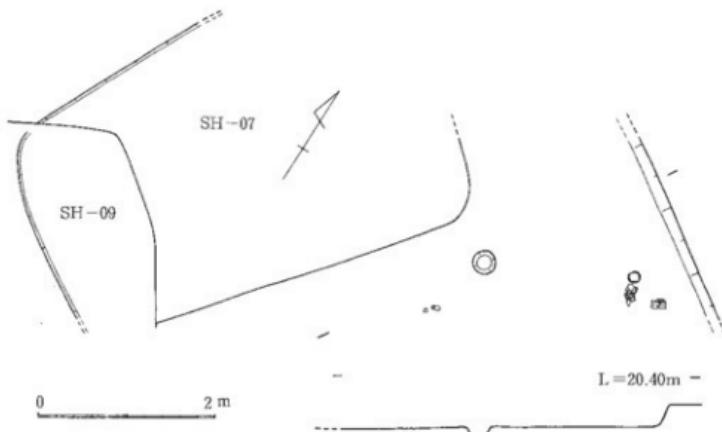
遺構の埋土は暗灰褐色粘土層で、多数の土師器片の他に須恵器片も出土しているが、須恵器片には時期を特定できる資料は含まれていなかった。他の遺構との切り合い関係や出土した遺物を検討した結果、SH-09は古墳時代後期末頃から7世紀初頭まで機能していたと考えられる。

SH-10は主軸方位をN-35°-W前後に取るやや隅丸の方形を呈する竪穴住居跡であるが、調査区南壁沿いで検出であった上、SH-09に東側を殆ど切られているため規模等は不明である。また出土遺物が少ないため時期等も明確にできないが、土師器片が出土していることや、SH-09に切られていることから古墳時代前期から後期中頃までの所産と推定される。

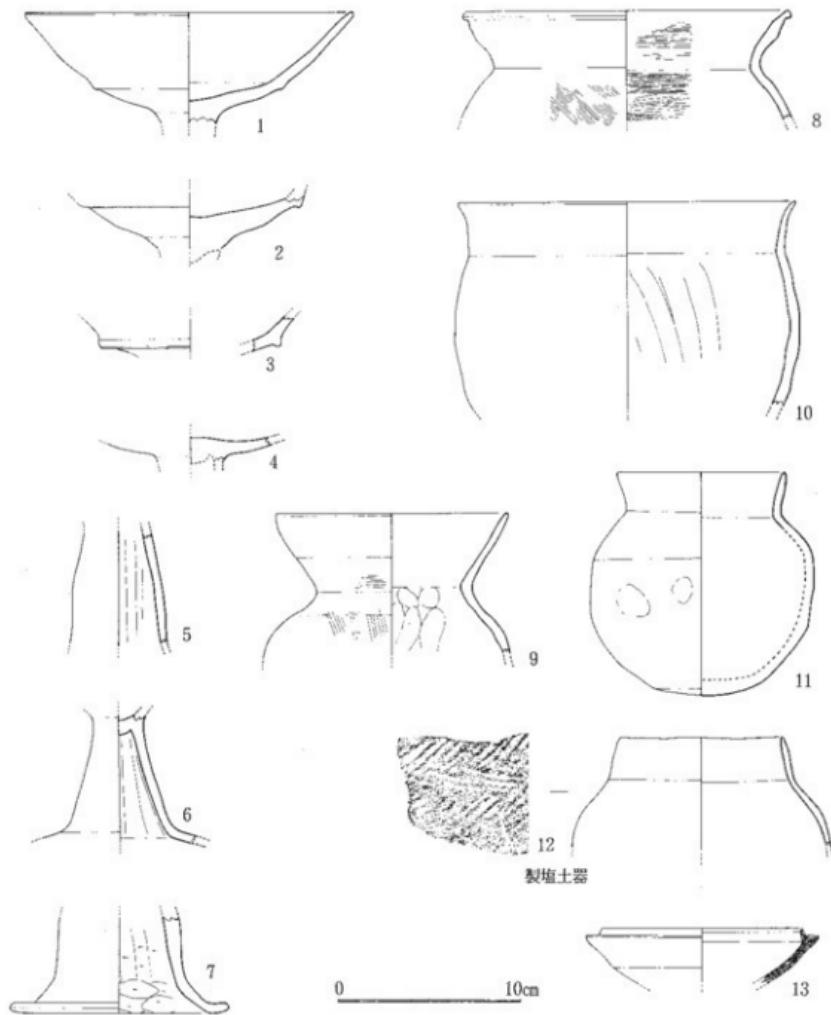
SH-11 東西に6.5m、主軸方位をN-58°-Wに取るやや隅丸の方形を呈する竪穴住居跡である。SH-11はSH-07・SH-09と重なっているため遺構の大半が削られしており、北東隅部が検出されただけであったが、両遺構よりも床面が深かったことから、それぞれの床面調査後に下層で柱穴2個と共にSH-11の床面が検出され、規模が剖明した。

遺構の埋土は黒褐色粘土層で、床面上から出土した遺物から古墳時代中期頃の所産と推定されるが、埋土最上部北東隅で暗灰褐色粘土の薄い堆積が認められ、中から6世紀末頃の製塩土器や土師器の壺・須恵器が出土している。これはSH-11上の別の遺構に含まれていた可能性が高いが、遺構面が削平されているため詳細は不明である。

SH-11は床面に堆積していた遺物から判断して、古墳時代中期頃に機能し廃絶したと考えられる。

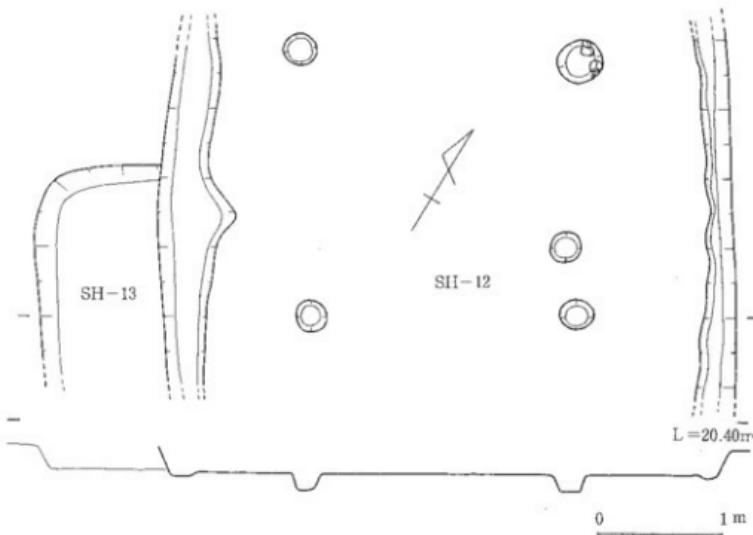


第42図 SH-11 実測図



第43図 SH-11 出土遺物実測図 (1～9：埋土下層、10～13：埋土最上層出土)
※SH-11に伴う遺物は1～9であり、10～13は追査埋没後の推積とみられる

SH-12・SH-13 SH-12は調査区北壁沿いにおいて検出された堅穴住居跡であるが、北端が調査区外にあり、南端は擾乱されているため、正確な規模は不明である。しかしながら5個の柱穴を含めて大半が検出できたため、東西に4.7m程度の方形若しくは隅丸方形を呈していると考



第44図 SH-12・SH-13 実測図

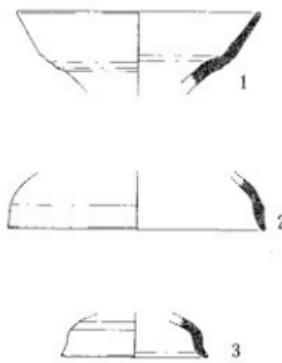
られる。また東西各壁沿いにU字形の壁溝が確認されている。

遺構の埋土は暗灰褐色粘土層で、出土した遺物等を検討した結果SH-07は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。

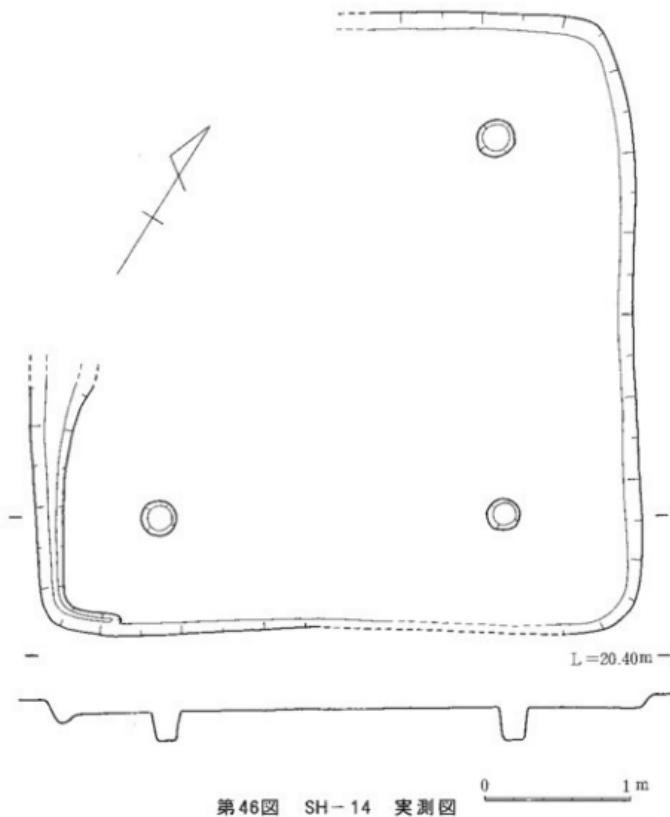
SH-13は主軸方位をN-33' - W前後に取るやや隅丸の方形を呈する堅穴住居跡であるが、SH-12と攪乱部に大半を切られているため、規模等は不明である。また出土遺物も少なく時期等も明確にできないが、須恵器片が少々出土していることと、SH-12に切られていることから古墳時代中期末頃から後期中葉頃までの所産と推定される。

SH-14 東西に4.2m、南北4.3m程の規模で、主軸方位をN-32' - Wに取る方形の堅穴住居跡であり、北西部隅を攪乱されているが遺存状況は良好である。

埋土は小礫を多く含む暗灰褐色粘土層で、遺物は極めて少なかった古墳時代後期頃の所産と推定される。



第45図 SH-12 出土遺物実測図



第46図 SH-14 実測図

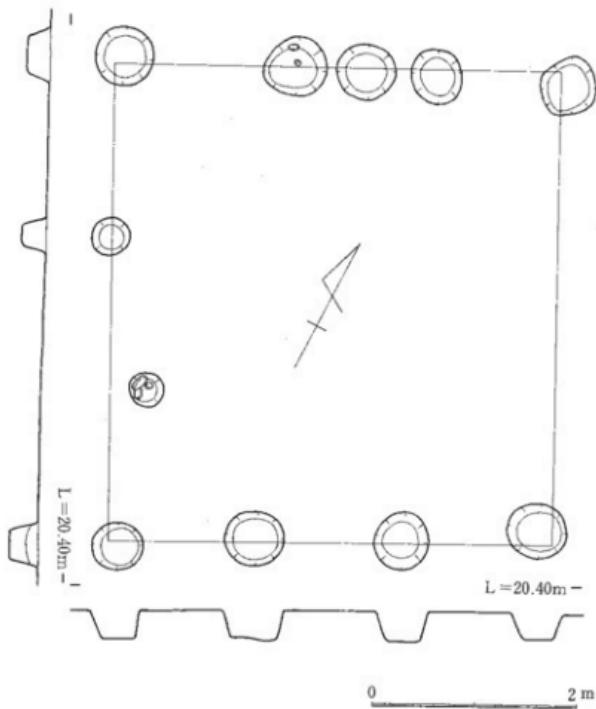
SB-06 3間（4.3m）×3間（4.7m）の規模ではほぼ方形を呈し、主軸方位をN-33°-Wに取る掘立柱建物跡である。柱穴は直径60cm円形ではほぼ統一されているが、一部の柱穴は造構面の削平時に失われているようであり、欠損した部分が認められる。

また、柱穴中には弥生土器片の他に須恵器や土師器の小片が含まれていたが、北西隅の柱穴からは7～8世紀頃のものとみられる土師器の小碗が出土している。

出土遺物や造構の内容からみて奈良時代頃の所産であり、SD-01～02・SB-05と同一時期に併存した造構ではないかと推定される。



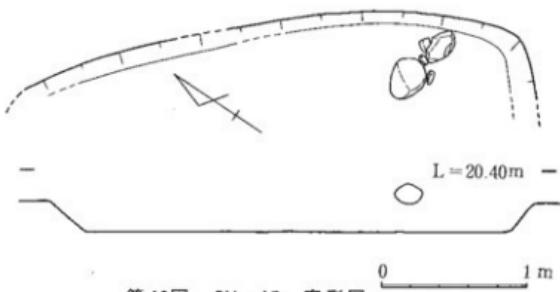
第47図
SB-06 北西隅PIT出土遺物実測図



第48図 SB-06 実測図

SH-15 主軸方位をN-40°-W前後に取る方形の竪穴住居跡であるが、調査区東壁沿いで検出されたため、遺構の大半は調査区外にあり規模等は不明である。

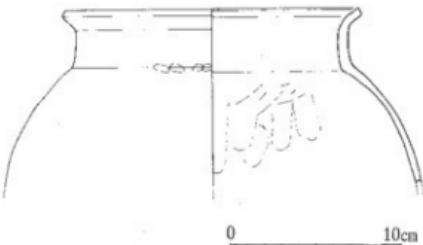
出土した遺物等から古墳時代後期頃の所産と推定される。



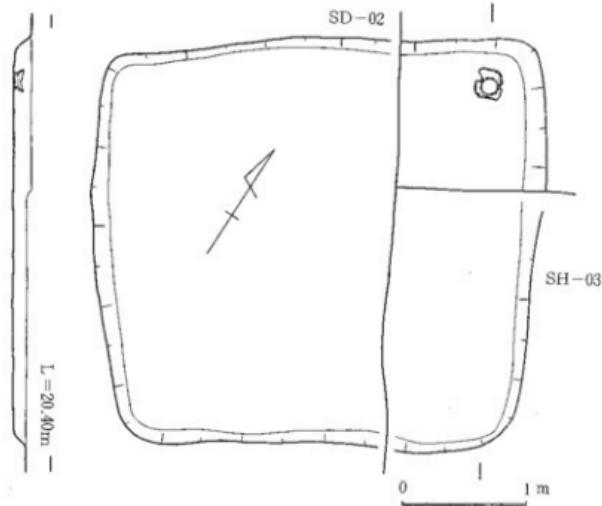
第49図 SH-15 実測図

SH-16 第3調査区の遺構を全て検出した後に全体写真の撮影を行ったが、その際にSH-03の北側に薄く方形の変色部分が認められた。撮影後に検出を試みたところ、柱穴は無いが床面上から伏せた状態で土師器の甕の口縁部が出土しており、竪穴住居跡とみられる。

規模は東西に 3.2m、南北に 2.8m で、主軸方位は N-33°-W に取り、古墳時代前期頃の所産と考えられる。



第50図 SH-16 出土遺物実測図



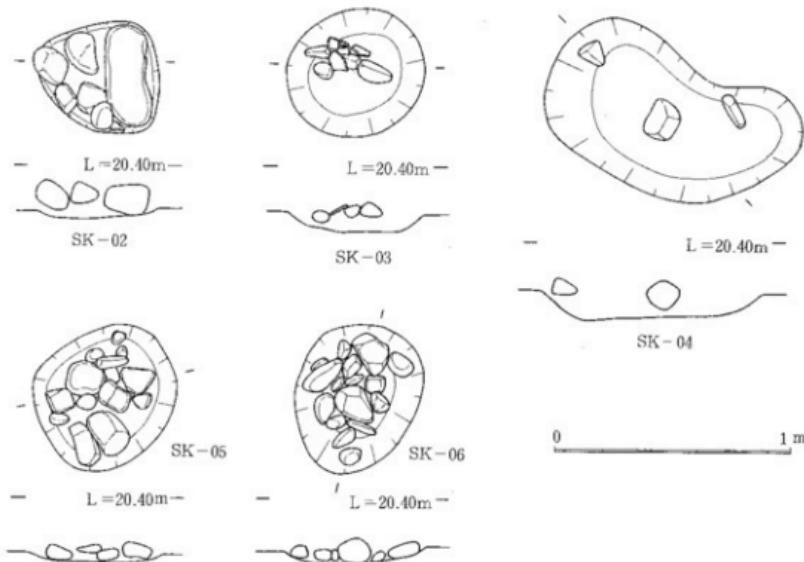
第51図 SH-16 実測図

④ その他の遺構と遺物

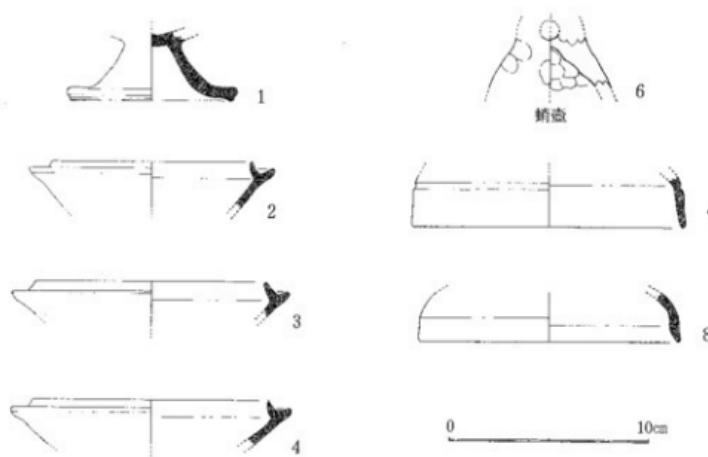
SK-02・SK-03・SK-04・SH-05・SK-06 第3 調査区では50~60cm程度の円形を呈する土坑が数個検出されている。土坑はいずれも遺構面と併に削平を受けており、その底部しか遺存していないが、いずれも中に多量の河原石と須恵器の壊片が詰め込まれていた。

性格は不明であるが、含まれている遺物や埋土の様子から7~8世紀頃の所産と考えられる。

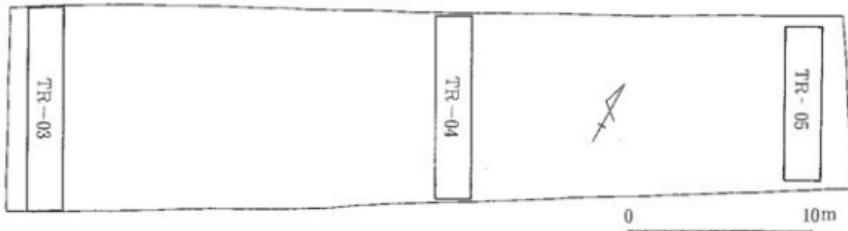
また、柱穴状の遺構中から出土した遺物のうち代表的な物を併せて図示した。



第52図 第3調査区土坑実測図（方位は全図上が北）



第53図 第3調査区土坑実測図
(1 : SP-099、2 : SP-116、3~8 : SP-117出土)



第54図 第3調査区トレント配置図

2. 小結

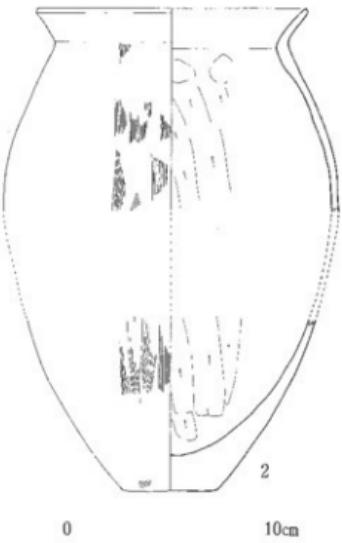
第3調査区では奈良時代から古墳時代にかけての遺構群の調査を一応完了した後に、わずかながら弥生土器片を含む第5層及び下層を確認するため、調査区中央と東西各両端に幅2mのトレントを南北方向に設置し、西からTR-03・TR-04・TR-05とした。

TR-03ではレベル高19.15～19.45mで礫層となり、暗褐色粘性土層から弥生時代後期末頃の甕片が出土しているが、ここでは第5層中に含まれる遺物は極めて少なく、遺構等も存在しないことが判明したので、続けてTR-04とTR-05の調査をもって全ての作業を完了した。

TR-04ではレベル高19.60～19.65mで、TR-05ではレベル高19.70～19.75mで礫層となった。いずれからも遺物等は全く出土していない。

今回の調査及び過去の調査結果を総合してみると、第1調査区西側と第3調査区東方それぞれに、南北に流れる自然河川跡が確認されていることから、古墳時代から奈良時代にかけての集落遺跡はここを中心に南北、特に南西に向かって大きく延びる、河道と河道に挟まれた微高地に広がっていると考えられる。

また弥生時代の集落についてみれば、今回の調査区を北限とし、やはり南西方向に広がり横断道稻木遺跡C地区まで延びているようである。



第55図 TR-03出土遺物実測図
(1～2：第5層出土)

第四章　ま　と　め

これまでに船木遺跡で実施された発掘調査結果を整理すると、昭和58年5月から昭和60年2月8日にかけて実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、今回の調査区から西方に300mの位置で弥生時代前期の溝・南方に200mでは弥生時代から平安時代の建物跡群・250m南東では弥生時代後期の集落跡と墓地が確認されている。また、県道西白方善通寺線改良工事に伴い昭和61年4月から昭和62年3月にかけて実施された調査では、今回の調査区の西側隣接地で弥生時代の自然河川を挟んで、弥生時代後期頃の墓地・東側隣接地では古墳時代の堅穴住居跡群と更にその東側が金倉川の氾濫原となっていることが確認されている。

従って、今回実施された調査の対象地区に古墳時代頃の集落遺構が広がっていることは予測されてはいたが、実際に古墳時代の堅穴住居跡16棟・掘立柱建物跡1棟・奈良時代の掘立柱建物跡2棟と土坑群、条里方向に流れる人工の水路等が発見され、予想外に古代人の生活の場が広範囲に及ぶことが判明し驚かされた。

遺構群の中で密度が最も高いのは古墳時代の堅穴住居跡群である。この地域では旧練兵場遺跡を中心に弥生時代の堅穴住居跡は多数確認されているが、古墳時代のものは殆ど知られていなかった。善通寺市内には400基を超える数の古墳の存在が知られており、未発見の大規模なこの時期の集落遺跡が埋もれているとは確実視されて来たことであり、古墳時代の生活文化を知る上で貴重な資料と評価できる。

古墳時代の堅穴住居跡は前期から後期末まで全時期のものが認められたが、SH-03・SH-04・SH-07では住居内で廐絶時の祭祀が行われたのではないかと考えられる痕跡も確認されている。これまでの例では、昭和59年から昭和60年にかけて実施された旧練兵場遺跡彼ノ宗地区的調査で、多数の弥生時代後期末頃の住居から廐絶時の祭祀跡が確認されているが、古墳時代後期頃まで同様の儀礼が継続してきたことは興味深い。

SH-07の祭祀は竈を中心に行われていたようである。竈はSH-05・SH-07・SH-09の3棟から、いずれも北壁の中央部に造り付けられたものが検出されているが、古いものは中期頃の所産である。SH-07で竈の検出状況をみると、最近まで民家の北隅に置かれていた“おくどさん”〔竈：くど、奥所：おくど〕を彷彿とさせる。“おくどさん”には必ず竈神が祀られていたが近代化に伴い最近はみられなくなった。古代、特に堅穴住居のような簡素な建物の中で最も重要な施設はやはり火を用いる竈であったであろうし、竈に祀られた神は家そのものの神でもあったであろう。従って、今後竈を持つ古墳時代の堅穴住居跡の発見例が増えれば竈の祭祀及び住居の廐絶に伴う祭祀を、より確実に証明できる事例も確認できるのではないかと考える。

このように、集落遺跡の発掘調査で得られるものの中には長い歴史の中ではぐくまれた我々の生活の伝統・文化を考える上で、欠くことのできないものが多いことに改めて注目したい。

また、最近は大規模開発やその関連事業等に伴う発掘調査が増加し、それらの結果を総合してみると、古代の善通寺市では、網の目のように流れる河道と河道の間に形成された多数の微高地

が存在し、その中で安定した部分にはいたる所に古代人の生活があり、遅くとも弥生時代後期までには旧練兵場遺跡を中心とした大集落を中心に、平野部に数多く散在する集落を含めて、極めて規模の大きな町が形成されていたことは疑いも無い。

今後、まだ増えると考えられる大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査を通して、この地区に広がる古代都市が復元できればと思う。



第56図 [参考資料]おくどさん背後の壁に祀られていた竜神・明治時代
～善通寺市立郷土館蔵～

図 版



第57図 調査前の風景・第3調査区（西から望む）



第58図 発掘調査風景・第3調査区（南西から望む）



第59図 第1調査区東壁土層



第60図 第1調査区第1遺構面検出状況（東から望む）



第61図 第1調査区第2遺構面検出状況（東から望む）



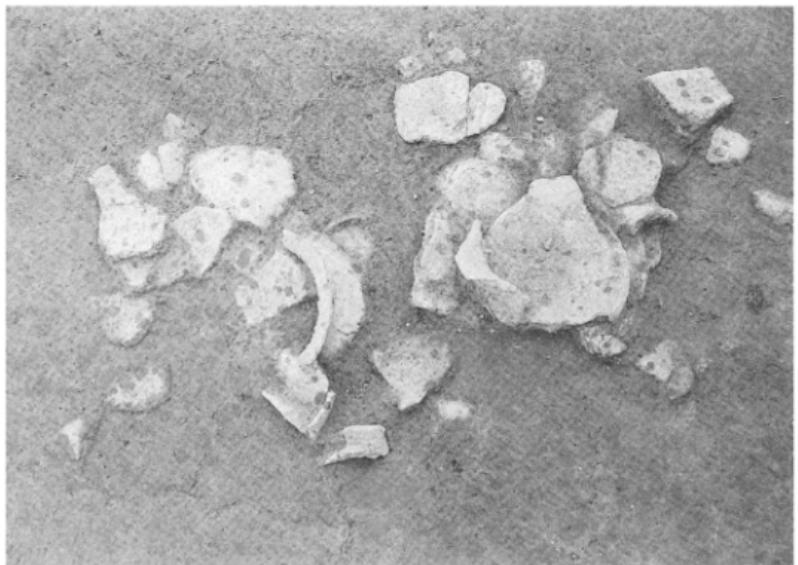
第62図 第1調査区第3遺構面検出状況（東から望む）



第63図 SB-01砥石出土状況（南から望む）



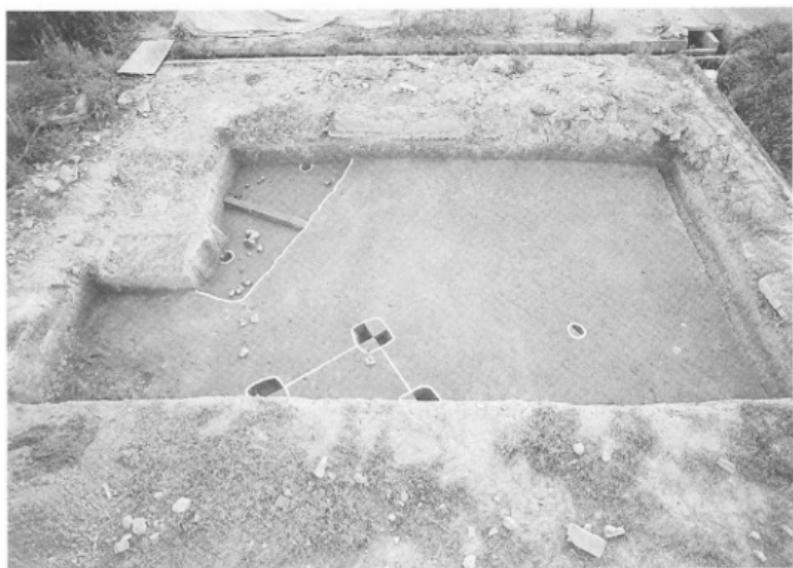
第64図 第1調査区第4層遺物出土状況



第65図 SR-01第5層遺物出土状況



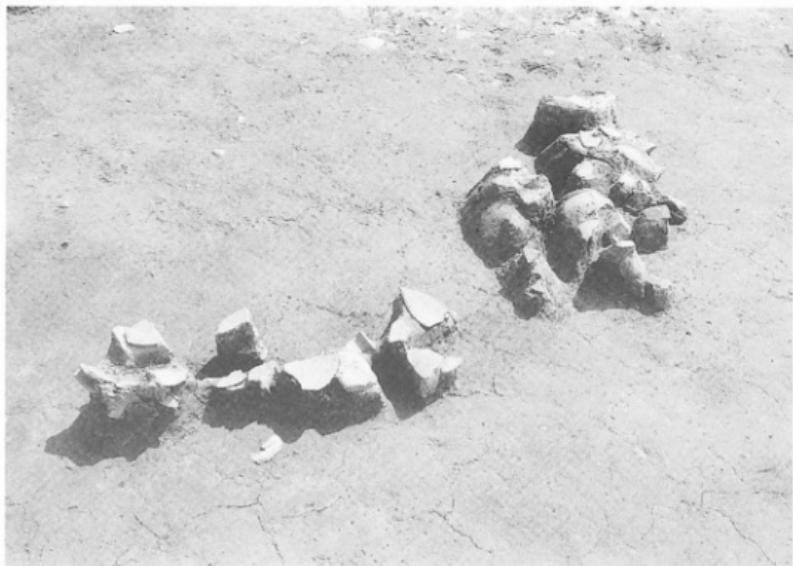
第66図 SR-01土層堆積状況・TR-01（西から望む）



第67図 第2調査区第2遺構面検出状況（東から望む）



第68図 第2調査区第3遺構面検出状況（東から望む）



第69図 第2調査区第3遺構面遺物出土状況



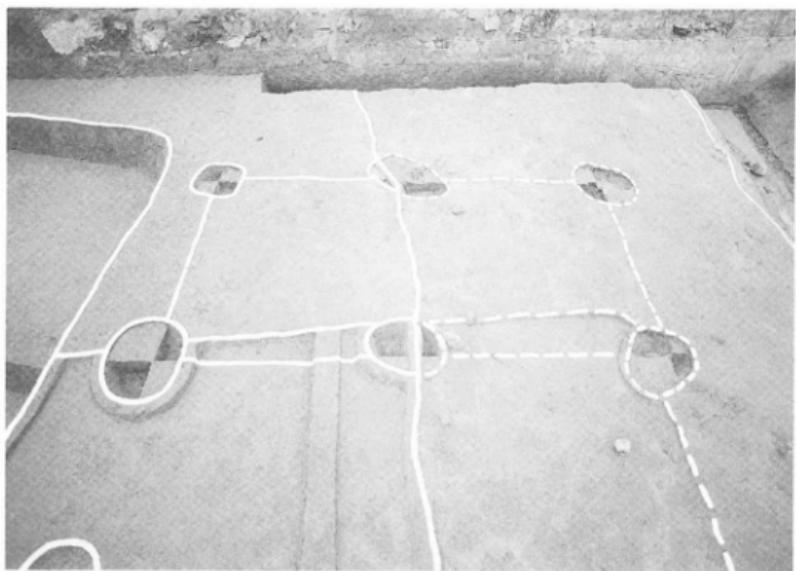
第70図 TR-01及び第2調査区東壁土層



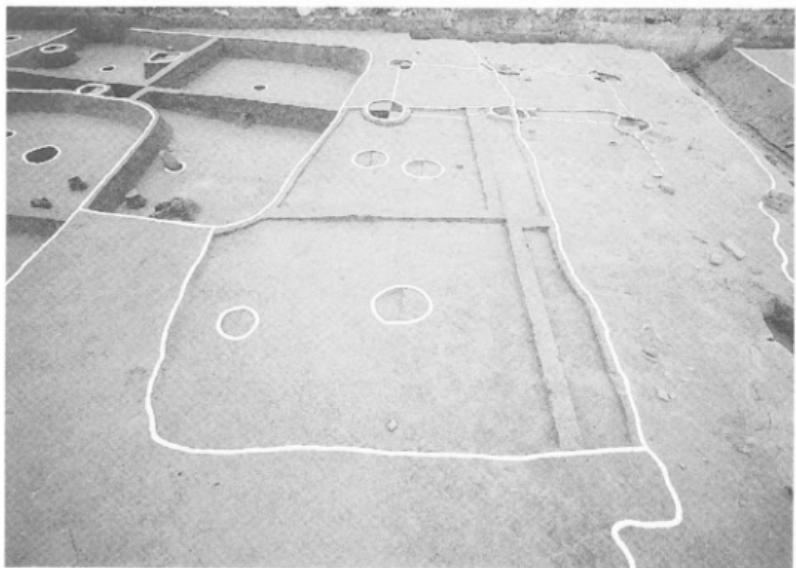
第71図 第3調査区全景（西から望む）



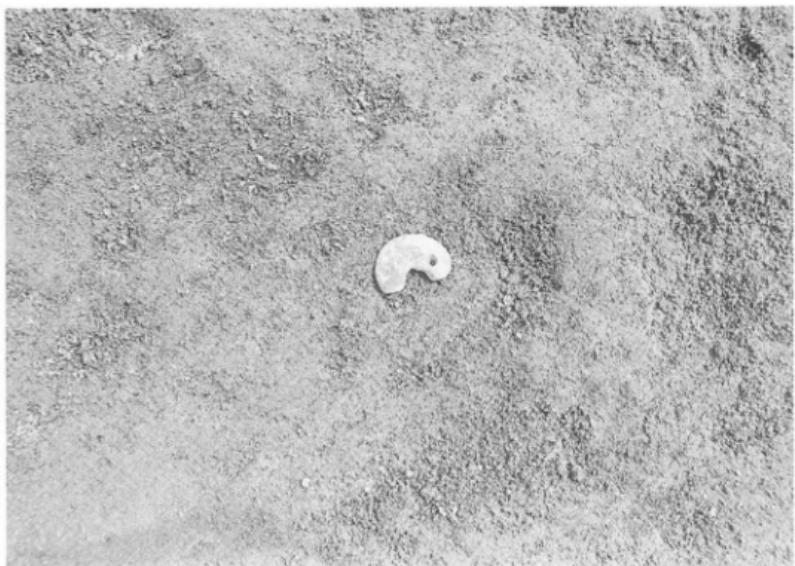
第72図 SD-01・SD-02検出状況（北から望む）



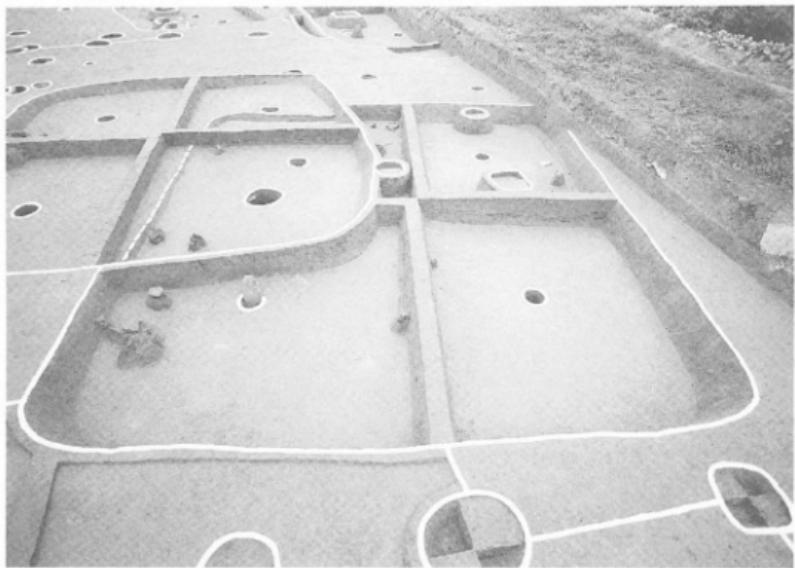
第73図 SB-01検出状況（北から望む）



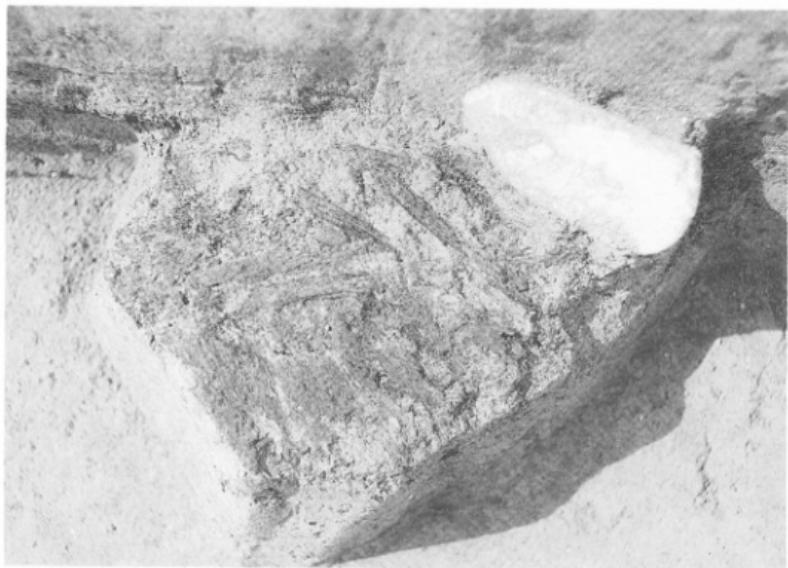
第74図 SH-03検出状況（北から望む）



第75図 SH-03遺物（硬玉製勾玉）出土状況



第76図 SH-04検出状況（西から望む）



第77図 SH-04炭化物出土状況



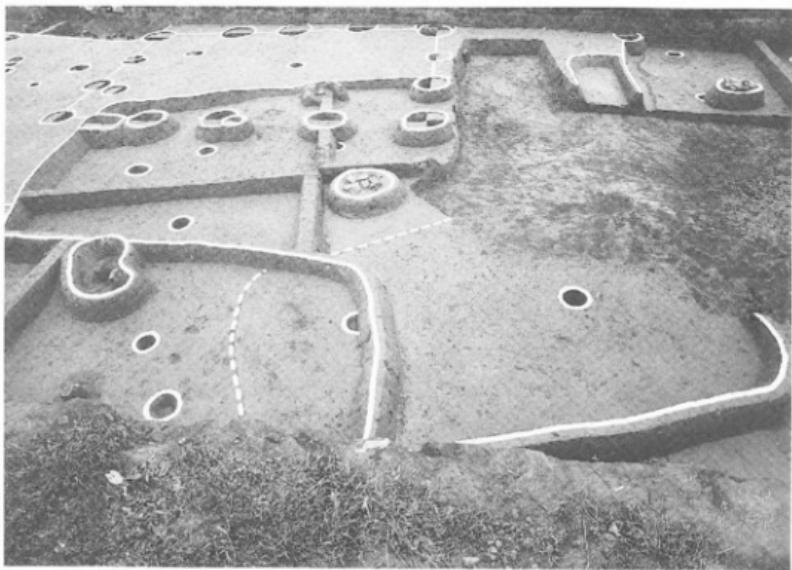
第78図 SH-04ミニチュア土器出土状況



第79図 SH-05検出状況（南から望む）



第80図 SH-06検出状況（南から望む）



第81図 SH-07検出状況（南から望む）



第82図 SB-05検出状況（西から望む）



第83図 SH-08・09・10検出状況（北から望む）



第84図 SH-11検出状況（北から望む）



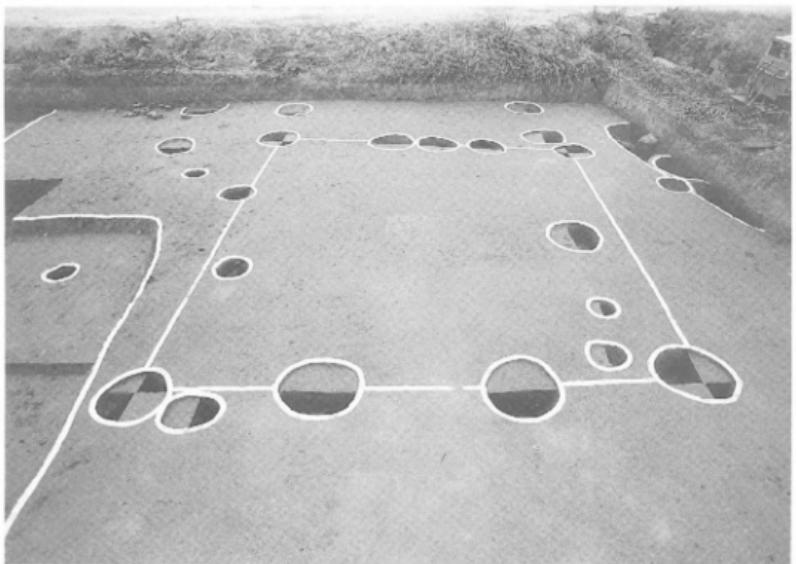
第85図 SH-11上層 遺物（製塩土器）出土状況



第86図 SH-12・13検出状況（南から望む）



第87図 SH-14検出状況（南から望む）



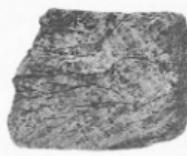
第88図 SB-06検出状況（南から望む）



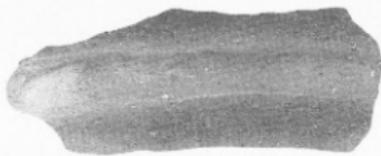
第89図 SH-16検出状況（西から望む）



第90図 TR-04設定状況（南から望む）



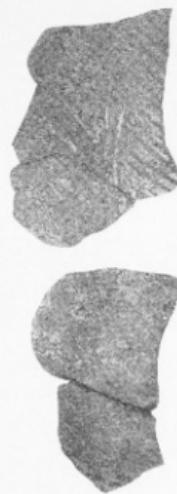
SB-01出土 破石



SD-02出土 瓷片

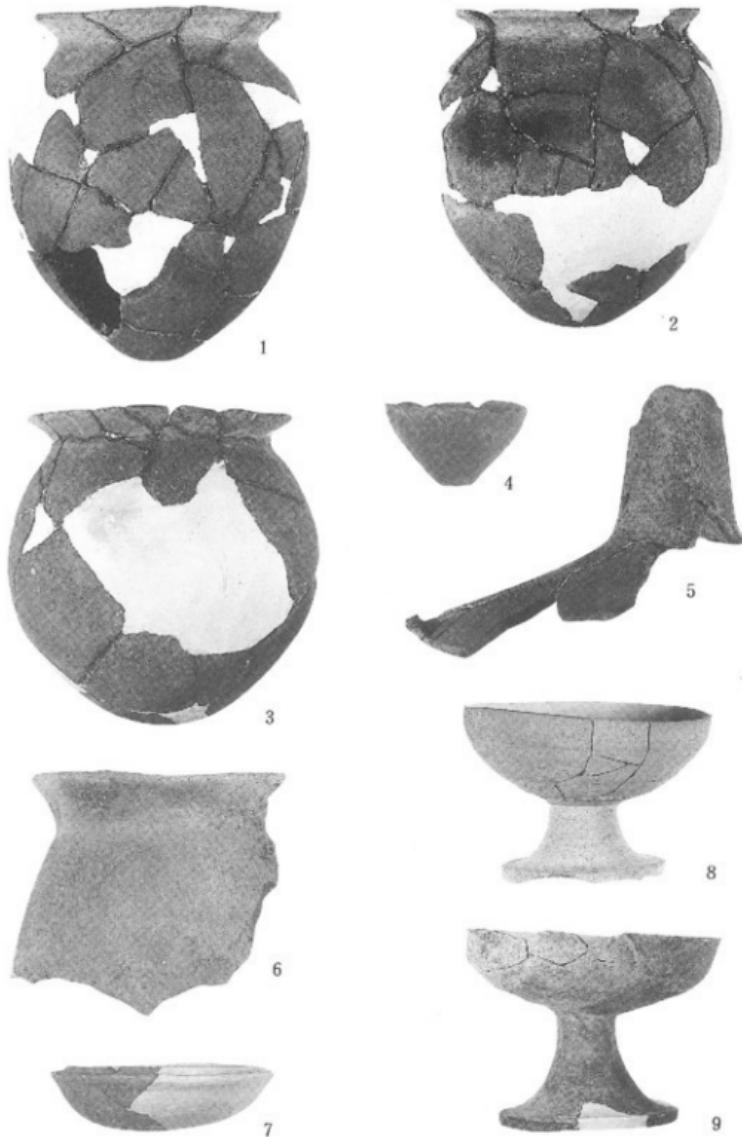


SH-03出土 破玉



SH-11上層出土 製壺土器

第91図 各遺構出土遺物



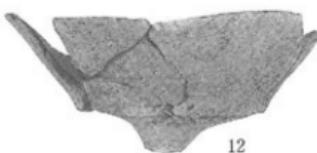
第92図 各遺構出土遺物
(1~5: SR-01、6: 第1調査区第1遺構面直上、7~9: 第1調査区第4層出土)



10



11



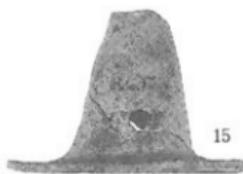
12



13



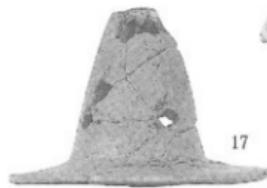
14



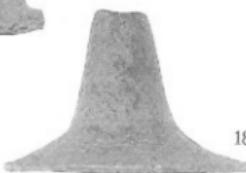
15



16



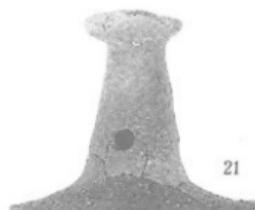
17



18



20



21

第93図 各遺構出土遺物

(10 : SH-02、11 : SD-01、12~16 : SH-04、17~18 : SH-05、19~21 : SH-06 出土)